The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴィシー政権下のフランス人民党　1940-1942年(1)
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2014, 64(1), p. 18-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57076
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヴィシー政権下のフランス人民党　1940 − 1942 年（1）

竹　岡　敬　温†

1. 元帥の一兵卒として

軍事的崩壊がついには政治的崩壊にまでいきつく過程で，その後の戦中から戦後にかけてのフランス史において，きわめて重要な役割を演じることになる２人の軍人が，あたらしく政府閣僚として加わった。ひとりは将軍，もうひとりは元帥であり，その後，それぞれ正反対の道をいきながら，ともにどちらもフランスの指導者を自認した。シャルル・ド・ゴールとフィリップ・ペタンである。

すなわち，対独宣戦布告をおこなった第３次ダラディエ内閣総辞職（1940 年３月 21 日）後，その後を継いだポール・レノー内閣は，1940 年５月 18 日，内閣を改造し，フィリップ・ペタンを副首相として入閣させた。さらに，政府がボルドーに移動した翌日の６月５日には，シャルル・ド・ゴールが陸軍省政務次官としてレノー内閣に入閣した（ド・ゴールは陸軍最年少の准将のひとりになっていた）。しかし，６月 16 日夜，「国の死活にかかわる重大問題について政府が深く分裂し」，「閣僚の半数がわたしに反対している」と判断したポール・レノーは総辞職を決意し，その結果，ペタンに次期内閣の組閣が要請された。ポール・レノーの辞職直前の６月 16 日午後４時 30 分，ロンドンに亡命していたド・ゴールは，ダウニング街 10 番地のイギリス首相官邸からレノーに電話をかけ，英仏同盟を両国間の完全な政治連合に変えるという計画を読み上げた。レノー自身は，このロンドンからの提案に望みをつないだとおもわれるが，しかし，午後５時に召集された閣議では，英仏連合国家のアイデアは冷淡に迎えられ，レノーは休戦に反対するかれの主張を最後まで貫徹しようとはせず，途中で勝負を放棄して，辞職を決意し，ペタンに席を譲った[1)]。首相に任命されたペタンは，駐仏スペイン大使をつうじて，ドイツに休戦の条件を照介した。その回答を待たずして，ペタンは，６月 17 日，ラジオをつうじて，フランス国民に，「断腸の思いで，わたしは，今日，あなた方に，戦いをやめなければならないことを告げる」と宣言した。これにたいして，ド・ゴールは，６月 18 日，BBC放送をつうじて演説をおこない，フランス国民に「抵抗の炎」を消さないよう呼びかけた。

軍隊の崩壊と敗戦の衝撃は，フランス国民を動転させた。この大きな混乱のなかで，フランス人の大部分は，困難に打ち勝ち，かれらを正しい方向に導いてくれる救い主にたいするかのように，ペタン元帥にすがりつこうとした。これに反して，軍規を破り命令を遵守せずにロンドンに亡命したド・ゴール将軍は，冒険好きで策謀家の将官とみなされ，その無謀な企てはほとんど成功の機会がないとおもわれた。ド・ゴールは，1940 年８月には，クレルモン・フェランで開かれた軍法会議で，脱走および国家反逆罪で死刑を宣告された。

† 大阪大学名誉教授

1) 第３次ダラディエ内閣の総辞職からポール・レノー内閣の成立とその総辞職までの過程については，竹岡敬温『世界恐慌期フランスの社会　経済　政治　ファシズム』御茶の水書房，2007 年，pp.642-647，679-687.

大多数のフランス人は，長かれ短かかれ，ある期間，ヨーロッパはドイツの支配下に置かれるであろうとおもいこんでいた。かれらは，ド・ゴールのように，国の不幸の最中にロンドンに亡命するとは，国外に逃亡する破廉恥漢の行動ではないかと考えた。イギリス海軍は，ドイツ軍にフランス艦隊を奪われまいとして，1940 年 7 月 3 − 4 日に，アルジェリアのメル・セル・ケビルでフランス艦隊に先制的な空爆をおこない，さらに，イギリスの港に停泊中のフランス船舶を拿捕した。この「現実政策（レアル・ポリティーク）」という非情な作戦行動のなかで，1,200 人以上のフランス水兵が死亡した[2)]。多くのフランス人には，ペタンの政治的権威と精神的器量は，かれらが陥った奈落から国を立ち上がらせるためには，かれに服従し，かれとともに努力するよう要求しているようにおもわれた。それに，1941 年 6 月までは，ロンドンからのラジオ放送は，ペタン元帥に敬意を払い，ペタンが北アフリカに赴き，ド・ゴール派の「自由フランス」と同盟を結ぶかもしれないという希望を抱かせていた[3)]。

ペタン元帥こそ，「奈落の底からフランス国民を救った指導者」として，熱烈に感謝され支持された人物であった。フランス国民が休戦を支持しペタンに帰順したのは，「無秩序（カオス）を本能的に回避したいという気持」からであった[4)]。敗戦と北部住民の南方への集団的避難によって多くが家族と別れ別れになったフランス国民は，その家庭，仕事，ふだんの生活を取り戻したいと願い，さらに，麻痺した国家の組織がふたたび機能して，警察が秩序を守り，司法が裁判をおこない，行政が機能するよう願った。

1940 年 6 月 22 日，かつて 1918 年 11 月 11 日，ドイツ軍が休戦条約に署名したと同じコンピエーニュ郊外ルトンドの林間の空地で調印されたドイツとの休戦協定は，イタリアとの休戦協定が 6 月 24 日にローマで調印されたあと，6 月 25 日に発効した。フランスの領土の北部，西部，南西部がドイツ軍占領下に置かれた。7 月 1 日，フランス政府は非占領地区のヴィシーへ移動した。

その間，ペタンのまわりでは，共和制を葬るための陰謀が仕組まれていた。7 月 10 日，上下両院合同の国民議会が招集され，ドイツとの休戦協定が結ばれた翌日の 6 月 23 日以来，副首相になっていたピエール・ラヴァルは，新憲法を制定するために，全権をペタンにあたえることによって，フランスと共和制の運命をペタンの手にゆだねる法案を可決させた。649 人の投票者のうち，569 人の議員が同法案に賛成したが，レオン・ブルムに率いられた少数派の 80 人の議員が，同法案が第 3 共和制にたいする合法的だが不当な死刑宣告であるとみなして，これに反対した[5)]（17 人が棄権）。7 月 11 − 12 日，新憲法の公布によって全権を掌握したペタンは，共和国大統領職を廃止して，みずからは国家主席に就任し，議会を休会した。副首相ラヴァルは，国家主席の後継者に指名された。これにより第 3 共和制は終わりを告げ，「自由，平等，友愛」は「労働，家族，祖国」という新しいモットーに置き換えられた。こうして，軍事的敗北は第 3 共和制の死にいたりついたのである。それは，完膚なきまでの軍事的敗北から受けた心的外傷の衝撃のもとで，狼狽

2) Robert O. Paxton, *Vichy France, Old Guard and New Order, 1940-1944*, Columbia University Press, New York, 1972, 1997, (traduction française) *La France de Vichy 1940-1944*, Editions du Seuil, Paris, nouvelle édition revue et mise à jour, 1973, 1997, pp.83-84, 渡辺和行・剣持久木訳『ヴィシー時代のフランス　対独協力と国民革命　1940-1944』柏書房, 2004 年, p.64.

3) Henri Amouroux, *La grande histoire des Français sous l'occupation,* 4 vols., Robert Laffont, Paris, 1976-1998, I *Le peuple du désastre. Quarante millions de pétainistes 1939-1941*, p.369.

4) R. O. Paxton, *op. cit.,* (traduction française), *op. cit.,* p.55, 渡辺・剣持訳, p.37.

5) Pierre Miquel, *Les quatre-vingts. Ils ont dit Non à Pétain le 10 juillet 1940*, Arthème Fayard, Paris, 1995.

し，途方に暮れ，第１次世界大戦をフランスの勝利に導いた「ヴェルダンの英雄」，ペタンに全権をあたえた国会議員たちによって正式に認められた共和制の死刑宣告であり，共和主義精神の70年間を否定した強力な専制体制の誕生であった。

しかしながら，他方で，戦前の反体制派の多くの政治家や思想家たちにとっては，第３共和制の無能ぶり，エリート層だけでなく国民全体の精神的退廃，そして，完膚なきまでの軍事的敗北と，その結果，フランス社会がさらけ出した嘆かわしい光景をおもうならば，ペタン元帥の杖の下，一刻も早く，もっと頑健な，もっと清廉潔白で完全で効率的な，新しい社会の建設されることが必要であったのである。

忘れてはならないのは，1940年７月後半にジャック・ドリオがヴィシーでかれの仲間たちと合流したときの，このような歴史的背景である。当時，ドリオは，ヴィクトル・バルテレミーにつぎのように語っている――「われわれは，ペタン元帥を政府の頭にいただくという，思いもよらない幸運に恵まれた。ペタン元帥の輝かしい過去の経歴は，戦勝国にあきらかに畏敬の念を抱かせるものだ。戦勝国は，イギリスにたいする勝利を確信し，チャーチルの大言壮語にもかかわらず，イギリスはドイツ軍の攻撃に耐えることはとうていできないだろうと考えている。」アメリカ国民は基本的には孤立主義者なので，ルーズヴェルト大統領が，西ヨーロッパの民主主義諸国にたいしてかれが抱いている好意的な感情にもかかわらず，枢軸国が勝利するまえに戦争に介入することはありえないであろう。ところで，「生まれつつある新しいヨーロッパ」においては，フランスはその立地条件，その海軍力，その植民地など多くの有利な条件をそなえている。しかし，それらの条件は，イギリスに宣戦布告してはじめて生かされるのである。イギリスは，７月３－４日に，メル・セル・ケビルに停泊中のフランス艦隊を沈没させ，わが国の水兵1,300人を死亡させるという，想像を絶する罪深い裏切り行為をおこなったばかりではないか。ペタンはイギリスとの国交を断絶したが，さらに一歩先に進まなければならない，イギリスにたいして宣戦布告しなければならない（ドリオは，1940年８月14日に，ヴィシー政府の外相ポール・ボードワンにたいして対英宣戦を主張するが，しかし，ボードワンの猛烈な拒否に遭っただけであった[6]）。「フランスを戦勝国の陣営に移し」，「戦勝国とほとんど対等に扱わせる」ことができるのは，この方法だけである――とドリオは強調している[7]。

1940年８月８日にヴィシーで開催されたフランス人民党全国評議会で，ドリオは同様の考えを展開し，つぎのようにのべている。「われわれはひとつの戦争に敗れたが，しかし，もうひとつの戦争に勝つチャンスがあります。われわれは，ただちにイギリスに反撃を加えなければなりません・・・フランス国民は速く目覚め，速く理解し，速く行動しなければなりません[8]。」

このすこしのちの９月15日，サン・ドニにおけるフランス人民党の活動の再開を示す市立劇場での1,800人の集会で，ドリオは，総括的な状況分析[9]のなかで，「イギリスはおそらく

6) Paul Baudouin, *Neuf mois au gouvernement, mémoires*, La Table Ronde, Paris, 1948, p.293sq; Dieter Wolf, *Doriot. Du communisme à la collaboration*, Arthème Fayard, Paris, 1967, p.326, 平瀬徹也・吉田八重子訳『フランスファシズムの生成　人民戦線とドリオ運動』風媒社, 1972年, p.325.

7) Victor Barthélemy, *Du communisme au fascisme. L'histoire d'un engagement politique*, Albin Michel, Paris, 1978, pp.178-180.

8) Cit. par Saint-Paulien, *Histoire de la collaboration*, L'esprit nouveau, Paris, 1964, p.158. サン・ポーリアンは，第２次世界大戦中のほとんど全期間をつうじて，フランス人民党の新聞発行と情宣活動の責任者であったモーリス・イヴァン・シキャールのペンネームである。

9) *Archives de la préfecture du police de Paris*, B/a 339, rapport de police de 16 septembre 1940.

戦勝国にはならないでありましょう」と明言したが，しかしながら，もしもイギリスが戦勝国になったならば，「フランスはイギリス国王の第１の自治領になるであろうことを忘れてはなりません。たとえ両国が共同で勝利したとしても，われわれが期待するような自由はえられないでしょう」とのべた。このようなドリオの発言に，イギリスのメル・セル・ケビル攻撃にたいする恨みの反応をみるべきであろうか，あるいは，イギリスと戦わなければならないとの確信の表明をみるべきであろうか。警察報告によるかぎり，このとき，ドリオはイギリスにたいする宣戦布告を要求してはいないが，おそらくそれはペタン元帥の外交政策に追従したからであったろう。一方，ドリオは，「わたしは，わが国が消滅しないように戦いつづけようとおもう人びとを捜し求めています・・・勝者との協力（コラボラシヨン）について話すのは困難ですが，相手が勝者としての義務を理解しなければならないように，われわれは敗者としてのわれわれの義務を理解しなければなりません。わたしは勝者との協力（コラボラシヨン）を受け入れる覚悟ができています。しかし，勝者の植民地になるのを受け入れることはできません」と強調している。

敗戦後のフランスで「対独協力（コラボラシヨン）」という語が最初に使用されたのは，1940 年 7 月 8 日に，ドイツが「その真の利害関係を理解する」ことを期待して，ギャストン・ベルジュリーが公表した声明のなかにおいてであった。その翌日の 7 月 9 日，ピエール・ラヴァルが「ドイツおよびイタリアにたいするフランスの誠実で信頼できる協力（コラボラシヨン）」を提唱したが，この表現は，国家主席ペタンの教書のなかでは，1940 年 10 月 11 日の，大部分がベルジュリーの示唆にもとづいて作成されたかれのメッセージにはじめて登場した[10]。

したがって，ドリオは，ペタン元帥に同調しつつ，対独協力の方向に踏み出すことを慎重に検討していた人物のひとりであったといえよう。つづけて，ドリオは，つぎのようにのべている。「フランスが国内の革命をなしとげたとき，ヨーロッパ人（「フランス人」と読むべきであろう）は，かれらドイツ人と議論することができるでしょう。フランスから民主主義の殻が消えてしまわなければなりません。そして，ヒトラーの支持者たちと討論するには，国家社会主義を理解している人びとが必要です」，その手始めに，国会の廃止，秘密結社の解散，ユダヤ人身分法の制定等の措置につづけて，「フリー・メーソンを行政機関から，ユダヤ人を実業界から決定的に追放する精力的な一連の処置が即刻とられなければなりません。」

同時に，ドリオは，ペタン元帥の提唱する「国民革命」に役立つ人物を助けるために，ペタンの側近から「かれの邪魔になるすべての無能な役立たずや潜在的な謀反人を追放できるように」，ヴィシー政権に強い圧力をかけるために，内相のアドリアン・マルケと接触した。この目的のために，ドリオは待機中のフランス人民党の党員すべてをヴィシーに動員することが可能であった。ドリオには，党員たちを動員して実力行使すれば，「本物の政権交替」と，ペタン元帥の指揮の下，暫定的にはラヴァルの下で，フランス人民党の政権掌握への道が開けるであろうとおもわれたのである[11]。

実力行使は，1940 年 8 月初めに予定されていた。そのために，フランス人民党の党員若干数がすでにヴィシーに到着していた。戦後、レオン・ブルムが 1945 年 7 月に開始されたペタ

[10] Henri Du Moulin de Labarthète, *Le Temps des illusions*, Cheval ailé, Paris, 1947, p.307.

[11] V. Barthélemy, *op. cit.,* pp.180-181. なお，ヴィシー政府の「国民革命」について論じた邦語文献には，渡辺和行『ナチ占領下のフランス　沈黙・抵抗・協力』講談社，1994 年 pp.89-106; ロバート・O・パクストン著，渡辺・剣持前掲訳書，pp.145-224; 川上勉『ヴィシー政府と「国民革命」ドイツ占領下フランスのナショナル・アイデンティティ』藤原書店，2001 年などがある。

ンの裁判でおこなった証言のなかで，このときのヴィシーにおけるフランス人民党の存在が1940年7月10日からの両院合同の国民議会の議員たちに及ぼした圧力について，「わたしは，そこで，2日のあいだに，議員たちが，まるで有毒な溶液に浸けられたかのように，みるみるうちに変化し，腐敗していくのをみました。影響を及ぼしたのは，恐怖，ヴィシーの街なかのドリオ一味の恐怖，クレルモン・フェランにいたヴェガンの率いるフランス軍兵士の恐怖，ムーランにいたドイツ軍の恐怖でした」と語っている[12]が，おそらくブルムは，フランス人民党があたえた影響を誇張していたとおもわれる。

ヴィシー政権時代にフランス人民党の情宣活動の責任者だったサン・ポーリアン（本名はモーリス・イヴァン・シキャール）は，このときの国民議会について，「一般の人びとのために取ってあったボックス席や2階のバルコニー席は，ドリオによって満員にされた」と虚偽の事実を語っている[13]。また，1938年6月に下院の議席を放棄し，すでに議員ではなくなっていて，しかも，この頃にはまだパリに滞在していたはずのドリオが，議院内に闖入して廊下で内相のマルクス・ドルモアと出会い，1937年にサン・ドニ市長の職からかれを罷免したドルモワを許すことができず，「お前なんか殺してやる。近いうちにだ。ドルモワよ，分かっているだろ」と罵倒したということが，目撃証人もないのに伝えられたりした[14]。

休戦協定によって，フランスはドイツとイタリアの占領地区，ドイツによる併合地区（アルザス・ロレーヌ），ヴィシーを首都とする自由地区に3分され，その間の自由な往来は禁止された。北フランス（ノール県とパ・ド・カレー県）は，イギリス侵攻作戦のために立入り禁止地区となり，ベルギーのドイツ軍政司令部の管轄下に置かれた。休戦協定直後には，フランス人民党は自由地区の主要都市，リヨン，ニース，モンペリエ，マルセイユ，トゥールーズ，クレルモン・フェラン，サン・テティエンヌ，ル・ピュイ等で派手な示威運動――デモ，ユダヤ人商店のショーウィンドウの破壊，パンフレットやびらの配布――を展開した[15]。

パリでも同様に，警視総監ロジェ・ランジュロンが，その個人的覚書きのなかで，すべての政党のなかでは，フランス人民党がもっとも党員数が多く活動的であり，同党がペタン元帥と政府の一部，さらには若干のドイツ占領軍筋やドイツ宣伝省のゲッベルスの手先などに，つよく支持されているように感じられると書きとめている。フランス人民党は，びらの配布，ユダヤ人商店の略奪，警察と協力してのユダヤ人商店への入店遮断などの，反ユダヤ宣伝活動を自由におこなうことを許されていた[16]。1940年8月3日，それまではパリから指令を出すだけであったドリオがヴィシーに到着して以後，フランス人民党は集会の回数を重ね，新聞でのコミュニケの発表も増えていった。ドイツ占領軍の情報部は，ドリオを完全に支持し，ロジェ・ランジュロンの証言によれば，「ラヴァルに反対するために，ドリオを利用しようとしているようであった。」つづけてランジュロンは，つぎのように書いている。「ドリオはヴィシーと元帥を定期的に訪れ，このようにして，単一政党の活動を指揮するのに必要な，元帥の威信を借りようとしているのだ。かれはそうするのに有利な立場にあり，その好機がきたと確信して

12) Léon Blum, *L'Œuvre*, Albin Michel, 1955, t. 5 *(1940-1945)*, pp.87-88; H. Amouroux, *op. cit.*, I, pp.494-495, Ⅱ, p.304; Jean- Paul Cointet, *Histoire de Vichy*, Plon, Paris, 1996, p.111.

13) Saint-Paulien, *op. cit.*, pp.109-110.

14) Vincent Auriol, *Hier, demain*, I, Charlot, Paris, 1945, p.126.

15) *Archives Nationales*, F^{7}15588, dossier《Partis et groupements politiques》, synthèse de l'Inspection Générale des Services des RG,《Vichy, le 4 juin 1941》, 98p., pp.62-63.

16) D.Wolf, *op. cit.*, p.322, 平瀬・吉田訳, p.322.

いる。しかし，ドイツ占領軍はそう考えてはいなかった[17]。」

ヴィシーに着いたドリオは，ヴィシー政府の最初の内相となっていたアドリアン・マルケ[18]と計画していた「宮廷革命（政権中枢内での権力移動）」のために，フランス人民党の幹部たちが掌握しているできるだけ多数の党員――おそらく数百人以上ではなかったであろう――をヴィシーに派遣することを提案した。その目的は，すべてにおいてあまりにも軟弱とおもわれたラヴァルを追放することであった。この作戦のためにはドイツ占領軍の特別許可が必要であり，ドリオは，ドイツ大使館にオットー・アベッツに会いにいった。アベッツは，それまではドイツ占領軍のもとでリッベントロープ外相のたんなる代理にすぎなかったが，1940 年 8 月 3 日に駐仏ドイツ大使に任命されたばかりであった。かれは戦前，永年フランスに滞在し，フランス女性と結婚していて，フランスのことをよく知り，フランスの急進党や社会党の政治家たちと親密な関係を結んでいた。アベッツの行動がフランス諜報機関の疑惑を招き，1939 年 6 月にフランス政府によってかれが追放されたとき，ドリオはこれに抗議していた。しかし，おそらく 1940 年 8 月 4 − 6 日頃におこなわれたアベッツとの会見では，ドリオは，ヴィシー政府の構成を変えるために暴力をいっさい使用したりしないよう勧告されて，失望した。アベッツがラヴァルに期待を寄せていたのはあきらかであり，ドリオと会う直前に，かれはラヴァルと会談していた。そこで，ドリオは他のドイツ占領軍当局者と接触しようと試みたが，結局は果たせず，ドリオたちのクーデタ計画は葬り去られた。おそらくアベッツからであろう，この計画を知らされたラヴァルは，9 月 6 日の内閣改造のとき，内相をアドリアン・マルケからマルセル・ペイルートンに代えて，事態を収拾したのである[19]。

このときのドリオの計画が拒否されたからといって，しかし，アベッツやドイツ占領軍当局がドリオをのけ者にしようとしていたわけではなかった。オットー・アベッツがリッベントロープ宛てにつづけて送った 2 通の文書で，アベッツは当時ドイツ軍の捕虜になっていたポール・マリヨンが「ドリオの情宣活動にとってもっとも活動的な協力者」であるという理由で，かれの釈放を懇願している。1938 年末にマリヨンがドリオと激しく対立して数年も経っていなかったにもかかわらず，その後 2 人が和解したのかどうかはかならずしもあきらかではなかったが，アベッツがこのようにドリオのために 2 人の仲をとりなそうとしたのは，ドリオがアベッツの個人的友人のひとりだったからであるのはまちがいない。そして，「ドリオは，占領下のフランスにおけるわれわれの政治活動のもっとも貴重な支持者のひとりであるにもか

---

17) Roger Langeron, *Paris, juin 1940*, Flammarion, Paris, 1946, pp.123-124 (18 juillet 1940), 135-136 (31 juillet) et 140-141 (3 août).

18) 1924 年以来，ジロンド県選出の社会党代議士，ボルドー市長。1933 年 11 月，マルセル・デアやバルテレミー・モンタニョンらとともに，レオン・ブルムに率いられた社会党（SFIO）のマルクス主義多数派と袂を分かった社会党分派のひとり。1933 年 12 月にフランス社会党（Parti socialiste de France）を結成。1934 年にはドゥメルグ内閣の労相となり，1940 年 6 月 27 日には，ペタン元帥の率いる最初のヴィシー政府の内相となった。この最初の内閣で，マルケはドイツとの協調の数少ない支持者のひとりであった。1940 年 8 月，ラヴァルを追放するために，ドリオとともにヴィシー政権の「宮廷革命」をたくらんだが，事前に発覚し，9 月 6 日，内閣改造によって，内相のポストをマルセル・ペイルートンに奪われた。1942 年 4 月には，ラヴァルが政権復帰したヴィシー政府に参加することを拒否し，フランス解放の日まで，ボルドー市長としてとどまった。戦後，逮捕され，4 か月の獄中生活ののち，1948 年 1 月，非国民罪で禁錮 10 年の判決を受けた。

19) V. Barthélemy, *op. cit.*, pp.185-186; D.Wolf, *op. cit.*, p.319, 平瀬・吉田訳, pp. 321, 340. ドリオは，1940 年 6 月末，ヴィシー政府にたいする政権奪取計画についてドイツ側の反応を知るために，やがてアベッツ大使の代理となる予定のドイツの外交官ルドルフ・シュライヤーと接触したようだが，しかし，それについては正確な情報は存在していない，とヴォルフがのべている。

かわらず，非占領地区で，まだ，よく整備された組織をもっていません」ので，かれには，このさい，ポール・マリヨンがもっとも役に立つだろう，とアベッツは主張している[20]。

また，1940年8月12日，パリで，ベルトラン・ド・ジュヴネルがベルギー労働党の指導者ヘンドリク・デ・マンに会ったが，デ・マンはそのすこしまえにアベッツと夕食を共にしていた。そのとき，アベッツは，ドイツ占領軍当局がたとえばデア[21]，ベルジュリー[22]，ドリオたちからなる「若い組織」

[20] Notes du 25 août et 9 novembre 1940, cit. par H. Amouroux, *op. cit.*, Ⅱ *Les beaux jours des collabos, le peuple réveillé, juin 1940-juin 1942*, pp.398-399.

[21] マルセル・デアは左翼政党の社会党（SFIO）からファシズムに転向した人物であり，ドリオとの比較のために，すこしくわしく，その生涯をたどってみたい。1894年にニエーヴル県の一村落に生まれ，パリのアンリ4世高校卒業後，1914年7月にエコル・ノルマル・シュペリウールの選抜試験に合格。第1次世界大戦には一兵士として動員され，4年間，歩兵隊に属して第一線で戦い，大尉として終戦を迎え，5度の表彰とレジオン・ドヌール勲章を受けた。戦後，勉学を再開し，1920年には哲学の教授資格を獲得した。1914年に社会党（SFIO）に入党し，1926年の補欠選挙でマルヌ県選出の代議士となり，以後，社会党内で理論家として頭角をあらわした。1930年頃には，マルクス主義を超越しようとした社会党内部の改革を企て，その著書『社会主義の展望』（1930年）で，上昇しつつある中産階級と衰退しつつあるプロレタリアートを結びつける「統制革命」を提唱したが，当時としてはきわめて斬新なその思想は，党首レオン・ブルムの反対に遭った。

1933年7月の社会党大会では，デアは，アドリアン・マルケ，ピエール・ルノーデル，バルテレミー・モンタニョンらとともに，ネオ・ソシアリストとして，レオン・ブルムの反対派の先頭に立った。同年10月，ブルムとネオ・ソシアリストたちとの衝突の結果，デアを含む28人の下院議員と7人の上院議員が除名され，かれらはフランス社会党・ジャン・ジョレス連合を結成した。1936年には，デアは反ファシズム知識人監視委員会に加盟し，1936年1-5月にはサロー内閣の空相となった。チェコスロヴァキア危機にさいしては，大多数のフランス国民と同様に，ミュンヘン協定（1938年9月30日）を承認し，その翌年，ヒトラーが今度はポーランドにたいしてダンツィヒの返還を要求し，またもや戦争の気運が高まったとき，ヒトラーに東欧浸食を許し，フランスに不干渉政策を勧めた文章「ダンツィヒのために死ねるか」を『ウーヴル』紙（1939年5月4日）に発表して，大きな反響を呼んだ。

1940年6月のフランス敗北後は，それ以前にもまして，ヒトラーとの協調の可能性を信じ，みずからの左翼的確信の本質と考えていたものを捨て去ることなく，同時に，フランスの悲惨な状態がファシズムの方法に頼るのを必要としていると信じた。ヴィシー体制が樹立されると，デアは，単一政党制を新体制の組織的，機動的基礎とするよう，ペタン元帥を説得しようとしたが，成功しなかった。この計画が失敗したあと，デアはパリに戻って左翼の対独協力政治紙『ウーヴル』を主宰し，「教権拡張主義と反動の中枢」，ヴィシー政府を非難しつづけた。

1940年12月13日，ラヴァルが解任されたとき，デア自身もヴィシー政府の命令によってパリで逮捕されたが，数時間後にアベッツがかれを釈放させた。その後も，デアは単一政党を結成する計画を断念しようとはせず，それが1941年2月1日の国家人民連合（Rassemblement national populaire, RNP）結成の動機となった。国家人民連合はアベッツの支持とラヴァルの承認を受け，全国在郷軍人連合会長ジャン・ゴワや革命的社会運動（MSR）の指導者で元「カグール団」のメンバーであったウージェーヌ・ドロンクルもそれに参加したが，デアとドロンクルとの同盟関係は1941年10月に終わった。

北部地区の対独協力運動を統一するためのデアのその後の努力はドリオの反対に遭ったが，しかしながら，1941年7月には，デアはドリオとともに「反ボルシェヴィズム・フランス義勇軍団（LVF）」の結成に参加した。1941年8月27日，フランス義勇軍団の最初の部隊を派遣するための式典のとき，ラヴァルの暗殺未遂事件が起こり，デアも重傷を負い，この事件は2人の絆を固めた。1942年には，デアは，『ウーヴル』紙に発表した論説（単一政党制を論じた小冊子に再録）で，フランス革命とジャコバン主義が国家社会主義を到達点とするヨーロッパ革命の源泉であるとする理論を展開した。ラヴァルとの関係は1942年には悪化しはじめたが，1943年9月に，ドイツにたいして対独協力政府の建設を訴え，他の対独協力主義者たちとともに署名した「フランス国家再生計画」を起草し，この計画はドイツ政府の支持を受け，ドイツ政府がヴィシー政権の改造を要求した結果，ラヴァルもこの要求に屈し，1944年3月17日の政令によって，デアは労相に起用された。

1944年8月以後，デアはドイツに亡命し，ジグマリンゲンで実体のない「政府委員会」に加わった。戦後，欠席裁判で死刑判決を受けたが，1945年3月，妻とともに南チロルに逃れ，イタリア北部，トリノの修道院を最後の隠れ場所とし，そこで1955年1月5日に死亡した。

[22] ギャストン・ベルジュリーは中道左翼の政党，急進党からファシズムに転向した人物である。1892年にユダヤ系ドイツ人の裕福な金融業者の私生児として生まれ，金持ちの若いブルジョワの母親によって育てられた。1920年に第1次世界大戦賠償委員会の事務局長に任命され，この職務をつうじて仏独問題や国際関係についての知識をえたことによって，1924年の総選挙で「左翼連合（カルテル・デ・ゴーシュ）」が勝利したとき，エリオ内閣の官房長官となった。それ以来，急進党に身を置き，1928年，1932年，

にフランス政府を代表してほしいと願っていることを知らせたという。ド・ジュヴネルが「あなたもよくご存じのように，この３人の人物は仲がよくありません」と指摘したのにたいして，デ・マンは「しかし，かれらがそれを望んでいる以上，いまは，そうしなければならないだろう」と答えたという。ド・ジュヴネルは，デ・マンのような精力的で勇気ある人物でさえもドイツ占領軍の意向にはさからえないと考えているのを知って，強い印象を受けたと告白している[23]。ド・ジュヴネルの警告通り，やがてヴィシーの小さな世界はデア，ドリオ，ベルジュリーの３巨頭支配によって急速に沸騰状態になった[24]。

『ウーヴル』紙上で，権威主義ないしはファシズムの全体主義体制の特徴的な道具であった単一政党制を主張し，ベルジュリーの支持を受けて，単一政党の結成をもくろんでいたマルセル・デアには，フランス人民党のような，自分の自由になる政党をもち，かれ同様，ペタン元帥の信頼を受けていたドリオは，どうしても必要な人物であった，ドリオもまた，ペタンがデアに単一政党の結成の任務を負わせていたかぎり，デアを必要としていた。しかし，２人の人物は，たがいに理解しあおうとはせず，相手を嫌っていた。ドリオはちびでまじめくさった哲学の教授デアを嘲弄し，デアは民衆扇動的な演説家ドリオを軽蔑していた。

しかし，ドリオとデアには，いくつかの共通点もあった。年齢は近く，ドリオが４歳年下であった。２人とも第１次世界大戦を経験していた。２人はともに左翼からきた。ともにそれぞれの属していた党に反逆し，除名されていた。そして，ひそかにであれ，ほとんど公然とであれ，ともに大きな野心を抱いていた。けれども，相違点も多かった[25]。かれらの肉体的外観――ドリオは背丈が 186 センチあり，巨大で「大男ジャック」と呼ばれていたのにたいして，デアは小さく，ずんぐりしていた――，教

1936 年にマント選挙区で急進党から立候補し，下院議員に選出された。1934 年には反ファシズムの態度を明確にし，ファシズムに反対する「共同戦線（フロン・コマン）」を設立したが，やがて，それを「フロンティスト党」と改称した（1936 年）。ベルジュリーは最初は人民戦線を支持したにもかかわらず，やがて，その対独強硬主義に反対して，それから遠ざかっていった。

その後，友人のドリュ・ラ・ロシェルと同様に，ファシズムの活動的な力に魅力を感じるようになり，1940 年以後のヴィシー政権下では，国民革命の信奉者として，ペタン元帥の傍らでさまざまな策を練った。しかし，かれの単一政党案は承認されず，かれを警戒していたラヴァルによって排除された。

ベルジュリーは，1940 年にも，すでに，戦争の行方について明晰な見通し（イギリスの反撃の成功，アメリカ合衆国の参戦，ドイツの最終的敗北）を抱いていたにもかかわらず，1941 年には，積極的な対独協力政策に賛成し，1941 年４月には，ヴィシー政府によって，モスクワ駐在フランス大使に任命された。それは，ドイツの対ソ宣戦の結果，外交関係が断絶する２か月まえのことであり，そのため，多大の困難に遭遇しながらフランスに戻ってこざるをえなかった。

ベルジュリーは，もしドイツ国防軍が 1941 年 10 月までに勝利しなければ，アメリカがソ連に提供できる巨大な物質的援助のために，運命はドイツ軍に味方しないであろうと予想したが，しかし，奇妙なことに，この予想は対独協力にかれが託していた希望を強めるばかりであった。

ヴィシー政府によって国民評議会の議員に任命されたが，1942 年に政権に復帰したラヴァルによってふたたび遠ざけられて，アンカラ駐在フランス大使に任命された。フランス解放後ただちに逮捕されたが，５か月間しか投獄されず，その後，1949 年２月に無罪の宣告を受けた。

23) Bertrand de Jouvenel, *Un voyageur dans le siècle, 1903-1945*, Robert Laffont, Paris, 1979, p. 395.

24) *Journal de Marcel Déat, Archives Nationales*, F^{7} 15342, 15 et 17 août 1940. ヴィシーに駐在していたアメリカ大使館付き海軍武官がマキシム・ヴェガン将軍（敗戦時のフランス軍総司令官）と昼食を共にしたときの会話をのちに回顧しているが，それによれば，ヴェガンは，デア，ドリオ，ベルジュリーが内閣に加わるのをナチスが要求していることをあきらかにし，そして，ラヴァルにたいする自分の無力を説明するために，「ペタン元帥が豚肉屋（ラヴァルのこと）にだまされている以上，わたしにはどうすることもできない」といったという。Nerin E. Gun, *Les secrets des archives américaines. Pétain, Laval, de Gaulle*, Albin Michel, Paris, 1979, pp. 96-97; Jean-Paul Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, Balland, Paris, 1986, p. 316.

25) Jean-Paul Cointet, *Marcel Déat. Du socialisme au national-socialisme*, Académique Perrin, Paris, 1998, pp. 189-190.

養――ドリオが独学者であったのにたいして，デアは高等師範学校（エコル・ノルマル・シュペリウール）の卒業生であり，哲学教授資格者で，輝かしい経歴の知識人であった――の違いにくわえて，精神的，心理的にも正反対であった。デアは内向的で，内気であると同時に高慢で，孤独を好み，女嫌いであり，まれにしか外出せず，模範的なほどつましい生活を送り，酒も飲まず煙草も吸わなかった。夜の社交パーティをあまり好まず，ぜいたくな暮らしを嫌い，金銭を軽蔑していた。一言でいえば，ドリオとは正反対であった。ドリオは文章を書くのは苦手であったが，反対に，ぶっ続けに何時間も楽々と演壇をひとり占めして話をすることができたのにたいして，デアは，とりわけジャーナリストとして，文章を書くことが抜きん出て得意であり，第2次世界大戦中には，日曜ごとに，かれが政治面の編集主幹をしていた『ウーヴル』紙の次週号のために，6回分の論説を一気にタイプライターで打っていた。

しかしながら，デアとドリオは，ともに，かれらの運命にたいして強い信念をもっていたかのように，本能的に勇敢で，危険を軽視するという性格において共通していた。デアについていえば，かれは第1次世界大戦で奇跡的に死を免れ，ヴィシー政権時代には，幾度もの襲撃に遭いながらも，命を落とさなかった。1941年8月27日，かれはヴェルサイユでラヴァルとともに暗殺未遂事件に遭って重傷を負い，翌年の1942年3月には，トゥールの市立劇場で集会を開いたとき，爆弾を演壇に投げつけられたが，爆弾が破裂するまえに，かれみずからその導火線の火を消して，演説を中断しなかった。さらに，1943年3月には，かれが生まれたニヴェルネ地方の小さな村で，小型機関銃の連射を受けながらも，命拾いした。

デアとドリオの2人の人物は，何度も接触の機会をもちつつも，最後まで，たがいに，執拗な競争相手でありつづけた。「デアはドリオのなかに，スターリン主義を捨てはしたが，なお，その方法に忠実にとどまりつづけるボルシェヴィキの姿をみて，かれを憎んでいた。ドリオはデアのなかの民主主義の知識人，プティ・ブルジョワを軽蔑していた。その後のかれらの変化にもかかわらず，かれらは，あたかもそれぞれがなお第2インターナショナル（デア）と第3インターナショナル（ドリオ）に属しているかのように，たがいに対立していた。古い自分の殻を脱ぎ捨てるのは，かならずしもやさしいことではないが，かれらはその生きた証明であった」（クロード・ヴァレンヌ[26]）。

それにもかかわらず，デアは，1940年7月5日以後の『ウーヴル』紙に，フランスはその敗北を制御し，ナチス・ドイツに味方して，新しいヨーロッパの建設のために尽力すべきであり，そうすることによってフランスは戦勝国の陣営に移ることができようという，ドリオの主張とほとんど同様な分析を展開した一連の論説を発表し，反響を呼んだ。ナチズムは，かれの考えでは，真に社会主義的で反資本主義的であり，フランスはこの精神においてその国民革命をなしとげるべきであった。「今後，フランスを再建しなければならない。政府の粛清を積極的に押し進めなければならない・・・アペリティフを禁止し，広く規律を守らせなければならない・・・一言でいえば，それは峻厳で知的な統制された革命である」とかれは1940年6月28日のかれの日記に書いている（アペリティフの禁止を除けば，そして規律が風紀にまで及ばないのであれば，ドリオもきっと賛成したことであろう）。さらに，デアは，ヴィシーを流れるアリエ川のほとりを散歩中に，かれの同僚で，かれ同様，哲学の教授であったルイ・ルージエとの会話のなかで，「もし必要なら，フランスは強制収容所で守られ，常時，銃

---

[26] Claude Varennes (pseudonyme de Georges Albertini), *Le destin de Marcel Déat*, Editions Janmaray, Paris, 1949, p.91.

殺執行隊がその職務を果たさなければならないだろう。新しい世界を産み出すには，鉗子を使い，痛みに耐えなければならない」と語っている[27]。

ペタン元帥の取り巻きにたいするデアとドリオに共通の敵意も，この 2 人のライヴァルを近づけたにちがいない。このことでの唯一の相違点は，デアが国民革命に賛同を表明する元社会党員や元急進党員など，過去の体制の名士たちを味方につけようとしたのにたいして，かれらに強い不信感を抱いていたドリオがデアを激しく非難したことであったろう。しかし，結局，狭い沼には 2 匹の鰐は住めなかった[28]。

1940 年 7 月以来，マルセル・デアは，長いあいだ考えてきた「単一政党」を組織するために努力してきた。7 月 8 日，かれは，『ウーヴル』紙に，「単一政党」についてのかれの見解をつぎのような言葉であきらかにした。「複数政党制は死んだ・・・イタリア，ドイツ，ロシアなど，革命をなしとげた他のすべての国民のように，われわれは，国家と政府のほかに，国民を組織し，リードし，力づけるひとつの党が必要である。議会は消滅し，この党のみによって政府と世論との接触は保証されよう[29]。」7 月 23 日，ペタン元帥はデアを迎え，デアが主宰する予定の「単一政党結成委員会」の設立に同意をあたえたようであった。8 月中，同委員会は毎日午前 11 時に会合を開き，会議での審議は，デアが作成しペタンの承認をえた文書にもとづいておこなわれた。しかし，議論は活発におこなわれたにもかかわらず，具体的な結論に達することなく，出席者の熱意は急速に冷めていった。

ドリオは，みずからは同委員会に出席しようとはせず，ヴィクトル・バルテレミーを代表として送っていた。フランス社会党（PSF）の委員長であったフランソワ・ド・ラ・ロックも出席しなかった。他方，グザヴィエ・ヴァラのような数人の右翼の人物のほかに，自分の属していた党との絆を断った元社会党員や元急進党員，レオン・ブルム内閣の閣僚（第 1 次ブルム内閣では国民経財相，第 2 次ブルム内閣では予算相）であったシャルル・スピナス，アリエ県選出の代議士ポール・リヴェ，あるいは元急進党内閣の閣僚で同党副委員長であったシシェリーなど，多くの元国会議員が出席していた。このように元国会議員が多数を占めていたことは，ドリオの神経をいらだたせた。かれは「このような委員会の構成は，国民革命の党の結成に不可欠な，活動的な国民的勢力の結集を容易にはしない[30]」と考えていた。ひそかに，かれは同委員会を「猿の委員会」と呼び，その作業の成功を信じようとはしなかった[31]。

ドリオは，かれにパリ地域で単一政党を組織する任務を任せてくれるようデアに要請し，自筆で署名された文書によってその許可をえた。ドリオは，デアの承諾をえて，パリ 1 区ピラミッド街のフランス人民党本部に単一政党組織地方委員会を設置した。ドリオがデアにこれらの任務を任されたことは，デアの私的な日記（1940 年 7 月 27 日，土曜日）によっても確認される。さらに，ドリオは 2 度にわたってドイツ大使館にオットー・アベッツを訪問し，新しい党の組織計画の大綱にかれを同意させた[32]。それだけではなく，ドリオは占領地区に「国民革命のための連合委員会」を設立し，ペタンの名を持ち出して，さまざまに立場を異にする人物——たとえば極右のピエール・テタンジェだけでなく，1939 年 8 月 23 日の独ソ不可侵条約締結後，共産党を離党した元同党書記のマルセ

27) Louis Rougier, *Mission secrète à Londres*, Editions du Cheval ailé, Paris, 1948, p. 54.
28) J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 317-319.
29) *L'Œuvre*, 8 juillet 1940.
30) Jacques Doriot, *Je suis un homme du Maréchal*, Grasset, Paris, 1941, p. 93.
31) V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 182-184.
32) R. Langeron, *op. cit.*, p. 164.

ル・ジットン，上院議員でボビニー（セーヌ県）市長のジャン・マリー・クラマミュー，下院議員のアンドレ・パルサル，マルセル・キャプロン，マルセル・ブルー等――を集めようとした。日記のなかでのデアの示唆（1940年9月3日ほか諸所に）や回顧録のなかでのサン・ポーリアンの主張によれば，1940年8月末か9月初めにパリに戻ってからの，これらのドリオの活動は，ラヴァルだけでなくペタン元帥の承認を受けていた[33]。

本当に，ペタンは，パリにおけるこれらの任務を果たす正式な権限をドリオにあたえていたのであろうか。サン・ポーリアンによれば，1940年8月初め，ペタン元帥がドリオに「わたしは以前からあなたを知っている。もしリフ戦争中のあなたの行動について世間で噂されていることのすべてが真実であったならば，このわたしとの会見はなかったでしょう。しかし，わたしは，それが虚偽であることをよく知っているし，あなたがモロッコにいかなかったこともよく知っている」と語ったという。11月19日，ドリオは，パリでのかれの「任務」をペタン元帥に報告するために，ヴィシーに戻ってきたが，サン・ポーリアンは2人の会談に立ち会ったかのごとく，そのときの会話を生き生きと再現している。とりわけ，ドリオは，ペタン元帥にその政府をパリに置くように催促し，そうすれば，貧窮，飢え，占領の結果に苦しんでいる数百万のフランス人を力づけるであろうとのべ，会見のあと，ペタン元帥は，昼食を共にするよう，ドリオをひきとめたという[34]。

これにたいしては，ペタン元帥の官房長アンリ・デュ・ムーラン・ド・ラバルテートがまったく違った証言を残している。デュ・ムーラン・ド・ラバルテートがドリオを嫌っていたのはたしかであり，ペタンは，「1925年のリフ戦争のときの敵対者ドリオにたいして，軽蔑しか抱いていなかった」とかれは主張している[35]。そのデュ・ムーランも，1940年11月にドリオがペタン元帥と会見し，ついで食事に招かれたことを否定してはいないが，しかし，かれは，ペタンとの謁見を願い出るために，ドリオが『わたしは元帥の一兵卒である[36]』という小冊子（128ページ）の著書を利用したと信じている。しかし，かれがそう信じたのは誤りであり，その頃，同書はまだ出ていず，1941年2月末にしか刊行されなかった。かれの証言によれば，謁見は20分しか続かず，昼食への招待は当時ペタンには習慣的になっていた不注意による過ちの結果であり，「この昼食は大騒ぎになり，ド・ラ・ロック中佐は，わたしに，かれの組織のフランス社会進歩（PSF）のメンバーたちが，このような人物が元帥の食卓に座ったというニュースを聞いて不快に感じている，と知らせてきた」という[37]。

おそらく真実は，この両極端の中間にあったのであろう。ペタンはドリオを嫌ってはいなかったようで，1941年1月22日の法律により，国民議会に代えて設立されたかれの諮問機関「フランス国国民評議会」のメンバーにドリオを任命している。また，ペタンは，多くの新聞と同様に，フランス人民党の機関紙――南部地区では『国民解放』，パリでは『人民の叫び』――に補助金をあたえている（以後，『国民解放』紙は，マルセイユで週刊紙として発行された）。

最初，ドリオは，共産党機関紙『ユマニテ』の発行禁止（1939年8月26日，第3次ダラディエ内閣時）によって生じた空隙を埋めよう

---

33) *Journal de Marcel Déat*, 3 septembre 1940 et passim; *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Fossati,《Exposé des faits》du Commissaire du gouvernement et rapport de police sur le PPF.

34) Saint-Paulien, *op. cit.*, pp.160, 164-166; D. Wolf, *op. cit.*, p.339, 平瀬・吉田訳, p.334; H. Amouroux, *op. cit.*, Ⅱ, pp.293-294.

35) Saint-Paulien; *ibid.*, p.98.

36) J. Doriot, *Je suis un homme du Maréchal*, *op. cit.*

37) Saint-Paulien, *op. cit.*, pp.326-327.

として，『ヌーヴェル・ユマニテ』というタイトルで新聞を出したいとおもっていたが，しかし，ドイツ占領軍当局はそれを拒否した。おそらく，共産党員たちが『ユマニテ』紙の再刊の許可をえようとしていたからであったろう。ドイツ占領軍の検閲とのあいだで生じた悶着の結果，『人民の叫び』紙の第 1 号は，ようやく 1940 年 10 月 19 日に日刊紙として発行された[38]。ヴィクトル・バルテレミーによれば，発行資金はペタンの個人基金によって提供され，ペタンは，しばらくの期間，補助金の支払いを続けさせた[39]。1941 年 2 月には，ピエール・ピュシューが内相に任命されたが，それ以前にも，フランス人民党はペタン内閣の資金援助を受け，その金額は，サン・ポーリアンによれば，1940 年末まで，月額およそ 15 万フランであった[40]。ペタンがかれの政策を支持しようとするドリオの申し出を無視したとするならば，このような資金援助は説明不可能であろう。

単一政党制の計画はさまざまな思惑から反対が多く，単一政党を組織するためにデアやベルジュリーたちが払った努力は，まもなく挫折した。とりわけ，はじめは，この計画を推進しておきながら，新しい党がドリオによって乗っ取られるのではないかと恐れ[41]，その実行を見送ったラヴァルの一貫性のない政策の結果，計画は 1940 年 8 月初めには流産した。ペタンも，単一政党制にかならずしも乗り気ではなかった。1940 年 7 − 8 月に，ヴィシー政権の初代在郷軍人担当相グザヴィエ・ヴァラが，各種在郷軍人組織を「フランス戦士団」という単一組織に結合するという計画を立案し，ペタンもそれに全面的に賛成し，8 月 29 日，将来，単一政党にあたえる予定であった多数の権限を認めた，「フランス戦士団」を自由地区で創設する法律[42]にペタンが署名したとき，デアはかれの希望がむなしくなったことをはっきり自覚した。デアは 9 月 13 日にパリに戻ったが，その日記（10 月 31 日）のなかで，「ヴィシー一味」と，その支持を受けるドリオの策略にたいして，軽蔑の感情をむきだしにしている[43]。

ドリオのもうひとりのライヴァル，フランス社会党（PSF）の委員長フランソワ・ド・ラ・ロックは，既成の政党制度に批判的なヴィシー政権の考えにすばやく対応し，1940 年 8 月 8 日に，略称の PSF をそのままにして党名を変更し，「党」という名称を追放して，「フランス社会党（Parti social français）」を「フランス社会進歩（Progrès social français）」と改めた。1941 年秋には，かれの率いる団体（「フランス社会進歩 PSF」）の「フランス戦士団」への合流に同意したが，しかし，その合流は順調には進まなかった。また，ド・ラ・ロックは，1941 年には，ペタンによって設立された国民評議会や国民革命のための連合委員会にはいることを承諾したが，意見の相違のため，数か月で辞職し，やがて，ひそかに外国の諜報組織と接触し，それと協力する秘密のレジスタンス組織をつくり，しだいにヴィシー政府とは距離を置くようになった[44]。ド・ラ・ロックが政治の表舞台から姿を消したあと，デアはドリオのただひとりのてごわいライヴァルでありつづけた。

ドリオが 1940 − 1941 年の秋から冬にかけて『国民解放』紙と『人民の叫び』紙に掲載した

38) Philippe Burrin, *La dérive fasciste. Doriot, Déat, Bergery. 1933-1945*, Editions du Seuil, Paris, 1986, p.422; J-P. Brunet, *op. cit.*, p.322.

39) V. Barthélemy, *op. cit.*, pp.191, 198-200.

40) Saint-Paulien, *op. cit.*, p.161.

41) R. O. Paxton, *op. cit.*, (traduction française) *op. cit.*, p.234, note (113), 渡辺・剣持訳, pp.190, 378 注 (111); 渡辺前掲書, p.84.

42) 「フランス戦士団」を創設するための法律は 1940 年 8 月 30 日の官報で公表されたが，戦士団が独自の軍事力になることを恐れたドイツ軍は，占領地区では，その設立を禁止した。渡辺上掲書, p.84.

43) *Journal de Marcel Déat*, 31 octobre 1940.

44) 竹岡敬温「ヴィシー体制と“フランス社会進歩”（1）（2）」『大阪大学経済学』第 61 巻第 1 号，2011 年 6 月, pp.60-90，第 61 巻 第 2 号，2011 年 9 月, pp.16-36; 剣持久木『記憶の中のファシズム「火の十字団」とフランス現代史』講談社，2008 年, pp.47-183.

論説は，1941年2月に『わたしは元帥の一兵卒である』と題した小冊子に再録されて公刊されたが，ひとつには，おそらくドイツ占領軍の検閲を考慮したためであったろうか，その内容は冗漫で，大衆に媚び，議論は単純で，ドリオの著作のなかではもっともおもしろみがなく，生彩に欠けた出来の悪い論説集でしかなかった。しかし，ドイツにたいするペタンの態度に賛意を表している箇所等をつうじて，幸いにも，ペタンとヴィシー政府の政治路線についてのドリオの考えをうかがうことができる。

ドリオがペタンを称賛しているのは，まず，1940年10月22日と24日に，モントワールで実現したペタンとヒトラーとの会談にさいしての，ドイツにたいするペタンの態度である。すなわち，ヒトラーがイギリス領ジブラルタルを奪取しようとして，ジブラルタル攻撃をスペインと協議するために，特別列車でスペイン国境に近いフランスの町アンダイに出発した旅行の途次，1940年10月22日，トゥールで，ラヴァルとヒトラーが会見した。その2日後，かたくなに中立を主張するフランコとの会見に失望しての帰路，ヒトラーは，トゥール近郊のモントワール・シュール・ロワールの鉄道駅でペタンと会談した。それは，ラヴァル＝ヒトラー会談によってお膳立てされたものであった。会談は一方的にドイツ側が望んだことではなく，数か月間にわたってフランス政府が懇願してきた結果であった。モントワールでヒトラーとペタンが握手を交わした6日後の1940年10月30日，ラジオをつうじて，ペタンは「今日，わたしは対独協力（コラボラシヨン）の道にはいる」と宣言した[45]。占領地区で発行されていたフランス人民党機関紙『人民の叫び』は，10月31日に，このモントワールでのペタン＝ヒトラー会談の写真を掲載し，この会談をドリオは，「多くのフランス人に危険を直視しようとはさせず，自分の国の自明の利益に反対してイギリスびいきのままでいさせる愚かな感傷癖にたいする，政治的知性と理性と論理の勝利」と呼んだのである（1941年1月5日）。

1940年11月末以降に書かれ，『わたしは元帥の一兵卒である』の後半に再録された論説は，もっぱらペタンを国民から引き離すためにかれの取り巻きに入り込み，そして，もっぱらペタンの政治路線を巧妙に変質させるために，かれの味方を装っている「旧体制」の支持者，フリーメーソン，左翼政治家たちにたいする批判と攻撃に満ちている。ペタンの政治路線は反民主主義的，反資本主義的，そして反議会主義的であるとドリオは明確に定義し，ペタン元帥は，過ぎ去った過去の体制に代えて，「階層化された国家，組織された経済，正当な労働報酬，家族の再生を実現しようとしている・・・しかし，この計画の実施は大きな困難に遭遇している。第3共和制から利益をあげた便乗屋や過去の体制の代表たちの頑固な幻想が，その実現を妨げている」（1941年1月3日）と書いている。

これらの文章がとりわけ執拗な悪口を浴びせているのは，おそらく，マルセル・デアとかれのまわりに集まっていた人物たちにたいしてであったろう。後述するように，デアは，単一政党案が流産したのち，国家人民連合（RNP）という組織を結成しようとしていた（国家人民連合RNPは1941年2月に結成される[46]が，その後1年とたたずに分裂する）。デアの名はドリオの文章のなかでしばしばあらわれ，1940年12月16日の論説のなかでは，ドリオは，デアにたいして，かれがフリーメーソン団に属して

[45] R. O. Paxton, *op. cit*., (traduction française) *op. cit*., pp. 114-117, 渡辺・剣持訳, pp. 90-93; François Delpla, *Montoire. Les premiers jours de la collaboration*, Albin Michel, Paris, 1996; Jean Pierre Azéma et Olivier Wieviorka, *Vichy, 1940-1944*, Académique Perrin, Paris, 2000, pp. 116-118; Jean Pierre Azéma, *Vichy-Paris, les collaborations. Histoire et mémoires*, André Versaille éditeur, Bruxelles, 2012, pp. 28-33.

[46] Marcel Déat, *Mémoires politiques*, Denoël, Paris, 1989, p. 596; J.-P. Cointet, *op. cit*., pp. 224-236.

いるのではないかとの嫌疑をかけている。その嫌疑には，しかし，たしかな根拠はなかった。ドリオとデアの反目は，2 人の人物のライヴァル意識以外に理由はなかった。

1940 年 11 月，ドリオはオットー・アベッツと連絡をとり，ヴィクトル・バルテレミーを伴って，ドイツ大使館にかれと会いにいった。バルテレミーの証言によれば，ドリオは，ドイツによって引かれた境界線が行政単位とまったく異なり，家族と切り離されたきわめて多数のフランス人が連絡しあうのを妨げていて，まるで守りの堅固な国境線のようで，絞首刑用の鉄環のようにフランス人の首を締めつけていること，それにもかかわらず，この境界線を毎日，多数のイギリスのスパイたちが越えていること，占領地区における 3 色旗の掲揚の禁止は，他の多くの措置とともに，「無益で馬鹿げた侮辱行為」のようにおもわれること，要するに，ドイツ占領軍の政策は「ヒトラー総統の声明とはひじょうにかけ離れている」こと等々を主張して，休戦協定のもっと柔軟な適用を要求した。これにたいして，「あなたの仰言る通りだ，ドリオさん。わたしは毎日，軍人たちとけんかしているのです。命令しているのはかれらであり，わたしはかれらの助言者にすぎないのです。大使という肩書きにもかかわらず，わたしは力のない助言者にすぎないのです」とアベッツは答えた。とりわけ，占領地区におけるフランス人民党の正式な承認にかんしては，ドリオの執拗な質問にもかかわらず，アベッツは慎重に返事を留保し，ドイツ軍政司令部の背後に身を隠して答えようとはしなかった。それに，アベッツは下層民出身のドリオをあまり評価せず，自分と同様，社会主義からの転向者，デアの方を好んでいた[47]。

ところが，1940 年 12 月 13 日，外相で国家主席の後継者に指名されていたラヴァルが，ペタンの命令によって突然解任され，逮捕された。この事件については，一部に対独協力に力を入れすぎたラヴァルを「愛国心に燃えた」ペタンが排除しようとしたのであり，モントワール会談直後の対独協力宣言にもかかわらず，その後，ペタンが二枚舌を使っていた決定的な証拠だとする解釈もある[48]が，しかし，それは，このような政治的意見の対立というよりは，両者の性格の不適合の結果でもあったようにおもわれる。

両者の生理的不一致としては，ペタンが喫煙を嫌い，それを我慢できなかったのにたいして，ラヴァルはいつもたばこを口にくわえていた。精神的不一致としては，「ペタンは伝統，形式，国家（行政・司法）機関，文書での報告を重視した。かれは，その政治の方法を決めるまえに，専門家の意見を求め，国民感情を考慮し，かれが自分自身のなかにみいだし，国民のなかに認める，フランスの尊厳についてのきわめて厳格な観念を尊重する傾向があった。ラヴァルは，これとは反対に，即興の人であった」（アルフレッド・ファーブル・リュス[49]）。ラヴァルは，硬直した機構や助言者の忠告を嫌い，ひとりで交渉するのを好み，とりわけドイツ人との話し合いをペタンにはくわしく知らせ

[47] V. Barthélemy, *op. cit*., pp. 203 - 205.

[48] J.-P. Azéma, *op. cit*., pp. 36 - 37 ; D. Wolf, *op. cit*., p. 341, 平瀬・吉田訳, p. 335. とくに，この「宮廷革命」に参加し，ラヴァルの後継ダルランとともに政府にはいった人物たちは，フランス解放後，このときのクーデタがドイツにとって「敗戦と同様に重大な」敗北，「軍事的対独協力の終焉」，仏独関係における「決定的な転機」になったと主張した。Yves Boutillier, *Le Drame de Vichy*, I *Face à l'ennemi, face à l'allié*, Plon, Paris, 1950, pp. 10, 260, 283 ; Marcel Peyrouton, *Du service public à la prison commune, Souvenir*, Plon, Paris, 1950, p. 183 ; *Le Procès Flandin*, Librairie de Médicis, Paris, 1947, p. 175. これにたいして，ロバート・パクストンは，この政変はヴィシー政権のおこなった多くの内閣改造のなかでもっとも理解しにくいものであるが，しかし，ヴィシー政権の基本路線が 1940 年 12 月 13 日に変化したとはとてもいえない，とのべている。R. O. Paxton, *op. cit*., (traduction française) *op. cit*., pp. 132 - 141, 渡辺・剣持訳, pp. 106 - 114.

[49] Alfred Fabre-Luce, *Journal de la France, 1939-1944*, Arthème Fayard, Paris, 1969, p. 309.

なかった。ラヴァルが対独協力に熱心であったのにたいして，国家主席としての特権を奪われまいとしたペタンは，イギリスとのつながりも維持しようとし，おそらく，そのため，あまり親独的ではない政策をとろうという気にもなったのであろう。それに，数人の知事からの報告は，世論がモントワールでのヒトラーとの会談に悪感情を抱き，とくにラヴァルにたいしてひどく怒っているという事実をあきらかにしてきていたのである。

この国内政治の大事件にたいして，ドリオはどのような態度を取ったのだろうか。サン・ポーリアンは，ドリオがラヴァル解任が間近かに迫っているのを知ったのは，かれが1940年11月末にヴィシーにやってきたとき，内相のマルセル・ペイルートンが，ドリオの意見を知りたくて，そのことをほのめかしたからだと主張している。まるでその場に居合わせたかのように語るサン・ポーリアンによれば，そのとき，内相は事実上ドリオにそのことを知らせたのだという[50]。しかし，このように重大な計画は極秘を求められようから，そのことを考えれば，内相がこのような打ち明け話をしたというのは，信憑性が低いようにおもわれる。

さらに，サン・ポーリアンは，ドリオが，このラヴァル解任という作戦の張本人か積極的な共犯者とみなされて，ドイツ警察に逮捕されるのを恐れ，「ドイツ占領軍当局がヴィシー政権のもめごとを解決するのを待ちながら」，エクーアン（セーヌ・エ・オワーズ県）近くの小さな村に数日間姿を隠したと主張している[51]。この話もまた同様に信じがたい。ドイツ占領軍の検閲はヴィシーの出来事を新聞が報道するのを禁止していたけれども，ラヴァル逮捕の噂は翌日の12月14日の午前中にはパリに広がっていた。パリ警視庁が，ラヴァル逮捕と同時に，マルセル・デアを逮捕するようにという命令をヴィシー政府から受けていたため，ラヴァル逮捕のニュースも伝わりやすかったのであろう。デアは朝7時に自宅で逮捕されたが，しかし，ドイツ占領軍の緊急の要請によって12時45分に釈放された[52]。

もしドリオがほんとうに自分の身の安全を心配したならば，かれは12月14日にはどこかに姿をくらましたことであろう。ところが，12月15日の9時30分から12時30分まで，かれはパリ1区ピラミッド街のフランス人民党本部にいて，パリ地区のフランス人民党幹部の非公式集会で議長をつとめていたのである。30人ばかりが出席したこの集会で，党活性化のためにドリオがおこなったさまざまな提案をまとめた警察報告[53]が残っていて，ドリオがこのときどこにいたかをあきらかにしている。この12月15日の晩には，ドリオは，ウィーンで死亡してその地に埋葬されていたナポレオン2世（ナポレオンの息子）の遺灰のパリ，アンヴァリッド（廃兵院）での返還式典に，ドイツ占領軍当局者たちと並んで出席している[54]（1940年12月15日は，ナポレオン1世の遺灰帰還のちょうど100年目にあたっていた）。『人民の叫び』紙にもいくつかの論説を寄稿し，ナチズムを賛美していた作家リュシアン・ルバテもこの式典に出席し，ドリオと会話を交わし，ラヴァルの排斥にたいしてドリオが満足感を示したの

---

50) Saint-Paulien, *op. cit.*, pp. 174-175.

51) Saint-Paulien, *ibid.*, pp. 182-183, 229; D. Wolf, *op. cit.*, p. 341, 平瀬・吉田訳, p. 335.

52) R. Langeron, *op. cit.*, pp. 206-209.

53) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, dossier《PPF. Rapports de réunions》, rapport du 15 décembre 1940.

54) ペタンも，この式典に参加していた。かれは，この機会にそれまでかれには禁じられていたパリへの旅行ができるのを楽しみにしていた。ラヴァル解任は，この式典のためにペタンがヴィシーを留守にするあいだに，ラヴァルがペタンにとって代わって国家主席になろうと企てているとペタンに信じ込ませた，ラヴァルに反対する閣僚たちの陰謀の結果であった，という解釈もおこなわれている。いずれにせよ，仏独和解を象徴するかにおもわれていた人物の解任は，大きな反響を呼んだ。J.-P. Azéma, *op. cit.*, p. 37.

を確認している[55]。いずれにしても，もしドリオが身を隠さねばならない危険を感じていたならば，パリから逃れるために，12 月 15 日の晩まで待ったとは考えられない。

それでは，ドリオ自身はラヴァルをどうおもっていたのであろうか。ドリオとラヴァルとの関係については，ドイツ親衛隊保安部（SD）の一通牒[56]に書かれているところによれば，ドリオは，内政の分野で，戦前の政策にあまりにも似た政策をラヴァルが続けていることを非難し，かれの失墜の責任の一半はそこにあると考えていたが，しかし，1941 年には，ドリオは，革命的な集産社会主義勢力はラヴァルに頼らなければならないと考えるようになり，両者の関係は急速に深まったという。

ラヴァル解任につづいた数週間，フランス人民党はペタンにたいする忠誠の意志を繰り返し表明した。1940 年 12 月 21 日の『国民解放』紙は，「元帥よ，あなたの命令のままに」という見出しをつけた。その見返りに，ラヴァルの後継ピエール・エティエンヌ・フランダンが『人民の叫び』紙の助成金を増額したのだろうか，デアが，1941 年 1 月 4 日の日記のなかで，「ドリオは当分，夜の宴会で乱痴気騒ぎを続けることができるだろう」と揶揄している。しかし，副首相としてラヴァルの後を継ぎ，新外相を兼任したフランダンは，外交政策では，一方で，かれが親しい盟友とおもっていたイギリスに配慮しながら，他方で，ラヴァルの罷免によって一時途切れたドイツとの関係を復活しようとしたが，失敗に終わり，この結果，1941 年 2 月 9 日，フランソワ・ダルラン海軍大将が後を引き継いで副首相に就任した。その 3 日後の 2 月 12 日，『人民の叫び』紙上で，ドリオはダルランの副首相就任を歓迎した。そして，同月末には，かれは，『わたしは元帥の一兵卒である』というセンセーショナルな題をつけた小冊子の著書を公刊したのである。このようにして，ドリオは，ヴィクトル・バルテレミーの表現によれば，「対独協力主義の主張とペタン元帥の人格の背後への後退とのあいだの一種のシーソー・ゲームを続けた[57]」のであった。

ドリオは，先述したように，ペタンに任命されて，1941 年 1 月以来，ヴィシー政府の国民評議会の 188 人のメンバーに名を連ねるようになっていたが，かれのライヴァル，デアは国民評議会からは排除されていた。1941 年 3 月 22 日の新しい法律によって，以後，国民評議会は全員出席の会議としては招集されず，順次開かれる 7 つの委員会に分けて招集されることになった。これらの委員会は，1941 年 5 月と 1942 年初頭に招集されたが，しかし，1942 年 4 月のラヴァルの政権復帰によって，国民評議会の委員会組織が致命的な変更を受けた結果，以後，ドリオはそこに席を占めなくなった[58]。

2. フランス人民党の再生 ──反ユダヤ主義の激化──

1941 年 2 月 1 日，マルセル・デアはパリで国家人民連合（Rassemblement national populaire）を結成した[59]。同連合の主要リーダーたちは，デアのほかに，全国在郷軍人連合（UNC）委員長ジャン・ゴワ，革命的社会運動（MSR，元カグール団）委員長ウージェーヌ・ドロンクル，元フランス人民党幹部ジャン・フォントノワらであった。また，国家人民連合には，ドリオとともに元共産党青年部の創始者で，1934 年に同党を追われ，1936 年にドリオとともにフランス人民党の創始者となったが，やがてドリオと決別したアンリ・バルベが加わっていて，1942 年には，その常任委員会の

55) J.-P. Brunet, *op. cit.*, p. 326.
56) *Archives Nationales,* F^7 15145,《Der Befehlshaber der Sicherpolitzei und des SD im Bereich des Militärbefelshabers in Frankreich》, 12 août 1942.
57) V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 225.
58) J.-P. Brunet, *op. cit.*, p. 327.
59) M. Déat, *op. cit.*, p. 596; J.-P. Cointet, *op. cit.*, p. 224 sq.

メンバーとなった[60]。

ドイツ大使館の全面的支持とパリの新聞の大部分から好意的に迎えられた国家人民連合は，ヴィシー政府が占領地区のフランス国民を貧苦と飢餓の状態に放置し，とりわけ，イギリス人，ユダヤ人，国際的フリーメーソン，金融資本家，アメリカの大砲商人たちとともに陰謀をたくらんでいると激しく告発した。さらに，ラヴァルを失脚させた1940年12月13日の政変を非難し，この政変が戦争捕虜の解放やフランスの再統合を遅らせ，占領費の削減を不可能にし，名誉と公正のなかで結ばれるべき賠償条約の展望を台無しにしたと非難した。マルセル・デアは初めはピエール・ラヴァルにたいして親近感をもってはいなかったが，2人が同時に逮捕されたことは，デアの心に「戦友愛のような感情」（アンリ・アムールー）を引き起こし[61]，こうして，国家人民連合はラヴァルの政権復帰のために精力的に活動した。

ヴィクトル・バルテレミーによれば，国家人民連合誕生の翌日，ドリオはこれを批判する論説を『人民の叫び』紙に掲載しようとしたが，ドイツ占領軍の検閲によって掲載を禁止された。このため，ドリオは検閲をからかい，この記事を2月2日のキリスト奉献の祝日（この日，クレープを食べ，ろうそくを捧げもつ行進がおこなわれた）のクレープの記事にさしかえたという[62]。1月半ば以来，ドリオが国家人民連合の結成準備についてヴィシー政府に通報し，その注意を促していたので，ペタン元帥の官房長デュ・ムーラン・ド・ラバルテートは，1月27日，ペタンの庇護下に，「国民革命のための連合委員会」を創設することによって，デアたちの動きの先手を打とうとしていた。ヴィシーに本拠を置いたこの「国民革命のための連合委員会」は――ドリオが先にパリで設立した同名の組織と混同してはならないが――，要するに，単一政党結成のあらたな試みであり，デアとその仲間たちの動きを牽制しようとするものであった。数十人の重要人物たちが同委員会の集会に参加し，集会は2月中続いた。デアと行動を共にし，大部分は国家人民連合に加盟していた元左翼の人物たちは，そのなかにはいず，その数十人のメンバー――在郷軍人組織を統一するために1940年8月にペタンによって創立された「フランス戦士団」を代表したフランソワ・ヴァランタン，フランス社会党（PSF）（1940年8月8日に，改名して「フランス社会進歩PSF」となる）を代表するジャン・ルイ・ティクシエ・ヴィニャンクール，シャルル・ヴァラン，フランス人民党を代表するアルベール・ブーグラとヴィクトル・バルテレミー――は右翼グループか政府関係組織を代表していた。しかし，同委員会の集会は，しばしば些細なことでの駆引きや無益な舌戦に終止し，とくに，フランス人民党とフランス社会党（PSF）との対立の観を呈して，なんの結論もえられないことがあった。

パリでは，ドイツ占領軍の検閲による修正を受けながらも，国家人民連合に反対するドリオの批判が続いていた。これにたいして，オットー・アベッツの補佐役で，ドイツ大使館参事官であったアッヘンバッハがドリオの激しい攻撃を静めようと，1941年4月1日，ドリオとデアを招いて夕食会を企画した。デアはゴワとドロンクルを伴って出席し，両者のあいだで新聞による論戦を中止する一種の休戦協定が結ばれた[63]。

その頃，フランス人民党は，政党としてはほとんど壊滅的な状態にあった。政党として公然と活動できなかったのは，他のすべての政党と同様であり，フランス人民党は，南部地区で

60) アンリ・バルベは，1942年10月に，ドリオと和解し，国家人民連合と決別しないまま，フランス人民党に再接近した。

61) H. Amouroux, *op. cit.*, Ⅱ, pp. 277-285.

62) V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 213.

63) *Journal de Marcel Déat*, 4 et 5 avril 1941.

は「“国民解放”紙の友委員会」，北部地区では「元帥の友」または「“人民の叫び”紙普及委員会」などの組織の陰で身を守らなければならなかった。しかも，『人民の叫び』紙の印刷部数は，1940 年 11 月の 8 万部から 1941 年 4 月には 5 万部に落ち，パリの 11 の日刊紙のなかでは 8 位で，多くの「大新聞」の後塵を拝していた。1941 年をつうじて，同紙の発行部数は減少しつづけ，同年 6 月には 2 万 5,000 部，11 月には 1 万 8,000 部にまで落ち込み，1941 年 7 月には，その売れ残り部数は 65 パーセントを記録し，状況はきわめて深刻であった。ドイツ国内外で諜報活動をおこなっていた親衛隊保安部（SD）の 1 報告は，1941 年 2 月以降，『人民の叫び』紙の財政的困難について言及し，同紙は近く廃刊になろうといっている[64]。これに反して，クロード・ジャンテを主筆とし，ドリオに近いジャーナリストたちによって編集された日刊紙『プティ・パリジャン』の発行部数は，1941 年 1 月から 8 月までにかけて，70 万部から 90 万部までのあいだを変動し，同年 7 月には売れ残り部数は10パーセントにすぎず[65]，フランス人民党は，この『プティ・パリジャン』紙によって，その影響を広めることができた。

当時，パリ地域の党員数はいちじるしく減少していた。1940 年 10 月には，パリ市の 20 の区のうち，40 人の党員数を数えた 20 区は例外的であり，その他では党員数が 10 人以上だったのは 13 の区だけであった。また，1941 年 3 月には，パリ郊外の諸地域の党員数は，ヴァンセンヌ 53 人，ロリー・スー・ボワ 43 人，バニョレ 37 人，ボワ・コロンブ 30 人，アニエール・シュール・セーヌ 17 人，クールブヴォワ，イヴリ，オーベルヴィリエでは事実上ゼロであった。パンタン（パリ北東部）支部の幹部は，かつてのドリオ支持者を集めるための努力は「ド・ゴール主義の大波」にぶつかっていると告白し，サン・モール・デ・フォセ（パリ南東部）支部の書記は，警察から集会禁止の通告を受けたことに不満を漏らしている。このため，パリ地域の支部幹部や書記の会合のたび，ドリオはかれらを元気づけ，その士気を高めなければならなかった[66]。

サン・ドニだけは 870 人の党費納入者が数えられたが，しかし，連絡のとれる党員は 200 人しかいなかった。集会での演説では，ドリオは，当時，日和見主義がほとんどすべてのフランス人の一般的な態度であるが，そのなかでフランス人民党は活気ある唯一の党であり，これにくらべれば，国家人民連合の結成はまったくの大失敗で，パリ地域でのメンバーはわずかに 1,700 人に達したにすぎないとのべて[67]，仲間たちを元気づけ，かれらのペシミズムとたたかわなければならなかった。

しかし，ドリオにとって不幸なことに，1840 年 8 月末にかれが設立した「国民革命のための連合委員会」がいまにも崩壊しようとしていた。同委員会を設立したときのドリオの協力者のなかには，元フランス共産党書記で，1939 年 8 月の独ソ不可侵条約に抗議して共産党を脱退したマルセル・ジットンや，右翼政治家で，やがてパリ市会議長となるシャルル・トロシューらがいたが，トロシューの周囲に集まる右翼勢力とジットンら共産党脱党者たちの動きをいかに共存させるかが，解決不能な問題となっていた。結局，ジットンとその仲間たちの数人はドリオの方針に反対し，同委員会を去っ

64) *Botschaft Paris*/1276, 11 Februar 1941; Ph. Burrin, *op. cit.*, p. 426. しかし，どうやらドリオは，その後，必要な資金をみつけたようであり，『人民の叫び』紙の発行はドイツ軍占領の終わりまで続き，発行部数も 1944 年 7 月の 11 万 5,000 部にまで伸びた。

65) Pierre Albert, Gilles Feyel et Jean-François Picard, *Documents pour l'histoire de la presse nationale aux XIXe et XXe siècles*, Editions du CNRS, Centre de documentation des Sciences humaines, Paris, 1977, p. 74 sq.

66) J.-P. Brunet, *op. cit.*, p. 331.

67) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, dossier《PPF. Rapport de réunions》, rapports des 15 décembre 1940 et 9 mars 1941.

て，フランス農民労働党（Parti ouvrier paysan français）を結成した。

パリは飢えていた。「パリ市民は腹をすかせ，あきらかな物質不足はかれらの気力にはっきりと影響し・・・人びとは思考力を失い，かれらの消化管が毎日の最大の関心事となっていた」（ピエール・ニコル[68]）。アルフレッド・ファーブル・リュスも，1942年に，「フランスから発せられた真の声は，空腹で鳴く腹の虫の声であった」と書いている[69]。寒さの厳しい冬場に石炭が不足し，とくに食糧，物資，燃料の補給がフランス人民党の党員たちの主要な物質的要求であった。そのため，ドリオは，このような党員たちの物質的要求を聞き，かれらの心情の代弁者となろうとすることによって，かれらを元気づけようとした。経済活動の崩壊の結果，失業者数は増加し，1940年10月には100万人以上に達し，戦前の恐慌がもっとも深刻であったときの登録失業者数の2倍以上を記録した。

家族は，国内を分断する境界線によって，また，捕虜としてライン川の彼方に収容されたために，離れ離れになってしまったメンバーのことを気づかった。ドイツに収容された戦争捕虜は，160万人を数えた。このような家族の悲劇と困難をすこしでも和らげるために，ドリオは，1940年7月から，フランス人民党本部に避難民受入れセンターと捕虜家族のための情報機関を開設した[70]。捕虜の面倒をみなければならない，とくに捕虜がフランス人民党の党員であるときには，かれらと文通し，かれらが釈放されるよう，関係部局と交渉しなければならない，とドリオは幹部たちに語った。ペタンが戦争捕虜の早期釈放のためにドイツとの交渉を担当させたジョルジュ・スカピーニ[71]は，フランス人民党にひじょうに近い人物ジャック・ブノワ・メシャンをベルリンにおける派遣団代表に任命した[72]。

ドリオは，また，同僚たちに，ペタンが1940年11月初めにパリ地域のために設立した慈善扶助機関，冬季相互扶助会で積極的に活動するよう指示している。この機関によって，1941-1942年の冬の期間，毎日，200万食の食事が供されたようである。ドリオはフランス人民党の党員たちの多くを冬季相互扶助会の重要ポストにつかせようとし，その職務についた党員たち40人ばかりを前にして，「可能な場所ならどこででも，党勢拡大のための潜入工作の活動を続けるべきである」と発言している[73]。これにたいして，マルセル・デアは，その日記のなかで，ドリオの手口を激しく非難している[74]。

1942年3月3－4日の夜，パリ近郊のブーローニュ・ビヤンクール（セーヌ県）がイギリス空軍の爆撃を受けた[75]。この直後に設立された労働者緊急救済委員会においても，フランス人民党は大きな力を発揮した。

イギリス空軍の爆撃はルノー工場をねらったものであったが，実際には，相当数の民間の建物にも爆弾が落下し，死者500人，負傷者1,500人以上を出し，ペタンは3月8日（日曜日）を全国民服喪の日にすることに決定した。葬儀は犠牲者の霊に捧げるために巨大な記

68) Pierre Nicolle, *Cinquante mois d'armistice*, Editions André Bonne, 1947, I, p.273.

69) Alfred Fabre-Luce,《L'oreille au ventre》, *Journal de France*, Paris, 1942, chap. Ⅷ, cit. par R. O. Paxton, *op. cit.*, (traduction française) *op. cit.*, p.281, 渡辺・剣持訳, p.228.

70) R. Langeron, *op. cit.*, p.124.

71) ジョルジュ・スカピーニは盲目の元保守派代議士で，在郷軍人の指導者であり，1930年代にヒトラーと会見し，1935年にはアベッツらとともに仏独委員会を設立した人物である。R. O. Paxton, *op. cit.*, (traduction française) *op. cit.*, pp.112, 117, 渡辺・剣持訳, pp.89, 93.

72) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, note du 15 décembre 1940.

73) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapports du 23 novembre 1940 et du 28 avril 1941.

74) *Journal de Marcel Déat*, 4 et 8 novembre, 26 mars 1941 et passim.

75) R. O. Paxton, *op. cit.*, (traduction française) *op. cit.*, p.282, 渡辺・剣持訳, p.229.

念碑が建てられたコンコルド広場で執りおこなわれ，数万人――30 万人ともいわれた――のパリ市民が参列した。フランス人民党は「もうたくさんだ！」，「人殺しめ！ヨーロッパ，アジア，アフリカ，アメリカ，オーストラリアなど，いたるところで敗れたイギリス人どもは，パリ地域では意気揚々と勝ち誇っている」と書いたびらを市民たちに撒いた。フランス人民党政治局員ジュール・トゥラードは，葬儀参列者のなかに，パリにおけるヴィシー政府代表のフェルナン・ド・ブリノンをみつけ，救済機関の創設を要求し，この組織――労働者緊急救済委員会――は，ドイツ占領軍の協力をえて，その監督下にただちに設立され，ドイツ政府は同組織の名誉会長ド・ブリノンに 1 億フランの小切手をあたえた。この金の出どころは，ドイツ占領軍の一員を襲って危害を加えたパリのユダヤ人たちに科せられた罰金であった。

その後も続いたイギリス空軍の爆撃は，同様に，人命喪失と大きな物質的被害をもたらし，労働者緊急救済委員会の大規模な介入が求められ，同委員会はいっそう充実した組織になった。同委員会が実現した成果を強調するために 1943 年につくられたパンフレットによれば，3 万 2,000 世帯以上の家族が救済され，1 億 2500 万フラン以上が罹災者に分配され，600 万フラン以上が負傷者に支給された。5,000 トンの家具が供給され，罹災家族の子供たちのために 7 万日の食事つき宿泊料が支払われた。罹災家族の子供たちや老人を施設や病院に収容するなど，同委員会は救済事業のための粘りづよい努力をおこなった。この事実を証明するために，ペタンのつぎのようなメッセージを引用できよう。「あなた方は，国の不幸とのたたかいにおける前衛です。わたしは，イギリスによる爆撃の犠牲者のためにあなた方がとられた効果的な行動にたいして，あなた方をほめたたえ，あなた方に感謝します。どうか，いまなさっていることを続けて下さい・・・」この救済委員会の活動資金は，フランス人民党のパンフレットによれば，ドイツ占領軍当局がユダヤ人の財産から徴収した 2 億フランと数万のフランス人から寄せられた少額の献金によって調達された。労働者緊急救済委員会の活動をつうじてフランス人民党が及ぼした決定的な影響は，同党の情宣活動と支持拡大にとってきわめて重要であったと想像される[76]。

1941 年 4 月初めには，フランス人民党は，ドイツ占領軍当局によって，北部地区での活動を暗黙裡に許可された。さらに，1941 年 10 月 29 日には，正式に承認されたが，これには，モーリス・イヴァン・シキャール（サン・ポーリアン）ら，南部地区のフランス人民党の幹部たちがリッベントロープ外相の長年の友人でドイツ赤十字社[77]の一大佐とマルセイユで交際を結んでいたことが決定的に影響したようであった。こうして，フランス人民党は，同年 4 月以降，しだいに立て直されていった[78]。

フランス人民党は，また，『人民の叫び』紙を利用して，食糧，物質，燃料の補給制度の欠陥，暗市，すこしのちには，ぜいたくなレストランに反対するための公開集会キャンペーンを開始した。これらの集会は，ポスターの貼付や大量のびらの配布にも助けられて，かなりの数の聴衆を集めることができた。たとえば，1941 年 7 月 6 日には，パリのヴァーグラム会館に 1,350 人の聴衆を集め，『人民の叫び』紙の編集者アルベール・クレマン，フランス青年団人民連合（フランス人民党の青年組織）の指導者

76) J.-P. Brunet, *op. cit*., pp. 334 - 335.

77) 自由地区のドイツ赤十字社は，ドイツ政府の防諜活動の隠れみのとなっていた。V. Barthélemy, *op. cit*., p. 224.

78) V. Barthélemy, *ibid*., pp. 224 - 225 ; *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Fossati, rapport sur le PPF; J.-P. Brunet, *op. cit*., p. 335. フィリップ・ビュランは，第 2 次世界大戦史委員会（現代史研究所に吸収）所蔵の史料にもとづいて，フランス人民党が正式に承認されたのは，1941 年 12 月であったとしている。Ph. Burrin, *op. cit*., pp. 428, 498 note (27).

ロジェ・ヴォークラン，占領地区のフランス人民党幹部アラン・ジャンヴィエ，そして最後にドリオ自身がつぎつぎと演説をおこなった。かれらの演説のなかでは，ヴィシー政府によって県ごと，あるいは基礎的食料ごとに任命された統制物資割当て官が人民戦線の元メンバーであり，法的処罰を受けたり，不適格を非難されたりした人物であり，また，ユダヤ人やフリーメーソンであることが繰り返し主張された。このような扇動的演説を後押ししたのは，人びとを苦しめていた飢えであった。そして，この大衆扇動的戦略の結果，1942年9月には，多くの県で，「じゃがいもが必要ではありませんか。冬の初めにひとりにつき75キログラムの配給を受けるため，この陳情書に署名して下さい」と書かれた，「“人民の叫び”友の会」の作成したびら，ポスター，陳情書名簿[79]が流布されるまでになった。

フランス人民党は，また，さまざまな同業組合の労働者たちにたいする情宣活動をおこない，かれらの要求を支持し，かれらを同党に引きつけようとした。この戦術の興味深い例のひとつは，1942年4月18日夕方，セーヌ川の舟の航行を妨げていた川べりの洗濯船のパリ市当局による撤去要請に反対して，パリ3区で同党が組織した抗議集会であろう。100人ばかりの洗濯女が出席し，『人民の叫び』紙の記者の短いスピーチのあと，10人ほどの洗濯女を代表団としてセーヌ県知事とパリ市会議長のもとに送ることが決定された[80]。

農民問題も忘れられなかった。1942年3月15日，パリの共済組合会館で農民問題を討論するために開かれた集会は，750人ばかりの聴衆を集めるのに成功した。しかし，このような情宣活動が重要であったのは，もちろん農村であった。1942年9月，入党申込書の付いたパンフレットが30万部印刷されたが，このパンフレットには，「フランスの農民は答える，はい，元帥閣下」と題され，フランス人民党の農業問題専門家のアンリ・ムーニエの署名の下に，『人民の叫び』紙に掲載された論説が再録されていた。それは同年3月30日に新聞紙上に発表された「敬愛するフランス国家主席」ペタンのメッセージに農民が答えた返答のかたちをとっていたが，見かけはペタンにたいする熱烈な恭順の姿勢を示しながらも，実際には，その背後で，フランス人民党が，農民に代わって，かれらの不満の種をくどくどと述べ立てたものであった。こうして，「じゃがいものストックを凍らせてしまった政府の経済運営が非難され，豚を太らせなければならない時期の真っ最中に大麦を製粉所にしまいこんでしまったために，農民たちはその代わりに小麦を豚に食わせねばならなかった」ことへの食糧・物資補給局の責任が追求された[81]。

1941年5月28日，フランソワ・ダルラン提督とドイツ軍のヴァーリモント将軍が議定書に調印したあと，ドイツは1914 − 1918年の大戦の旧軍人である7万人の捕虜を釈放した。かれらのひとり，フランス人民党幹部のイヴ・ドータンには，「フランス人民党戦争捕虜センター」を発足させる任務があたえられた。かれは党のシンパを集め，多数の集会を指導し，元戦争捕虜に通達を送った。1942年7月初めに元戦争捕虜全員に発送された通達のなかの，3ページに及ぶフランス人民党の宣伝文は，「釈放されたすべての捕虜は，フランスとヨーロッパにおけるみずからの使命をよく自覚し，今後，“フランスの永遠のいのちのために，ドリオとともに，ペタンに続こう”というスローガンを忘れてはなりません[82]」という激励の言葉で終わっていた。

もちろん，フランス人民党は，「フランスの

[79] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, et 340.
[80] J.-P. Brunet, *op. cit.*, p. 336.
[81] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339.
[82] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336.

数世紀来の敵イギリス」に反対したおびただしい数のびらを撒いたり（1941 年 4 月），「フランス人民党，それは秩序である。共産主義，それは無秩序である」というような折り込みちらしを大量に印刷する（1942 年 6 月）というような，もっと直接的に政治的な宣伝をおこなうこともあったが，それだけではなかった。フランス人民党の情宣活動には，広範な世論が「あるカテゴリーの人びと」にたいして抱く怨恨と憎悪を募らせ，それを党の利益のために誘導しようとした点において，どうしても見逃すことのできないもうひとつの側面があった。「あるカテゴリーの人びと」とはフリーメーソンとユダヤ人であり，ここでは，とくに，ヴィシー政権下におけるフランス人民党の反ユダヤ主義の活動に目を向けることにしたい。

フランス人民党の反ユダヤ主義については，ヴィクトル・バルテレミーは，1941 年 5 月に，ドリオがそれまで「比較的穏健」であったかれの反ユダヤ主義を硬化させ，『人民の叫び』紙の論説において，ドイツ軍占領当局が占領地区のユダヤ人にたいしてあらたに制定した厳しい措置に同意し，はじめて「ユダヤ人問題」を「民族問題」と定義して，「党の正式の反ユダヤ主義」を主張したと，その回想録のなかで書きとめるだけにとどめている[83]。

しかし，実際には，ドリオは，早くも 1940 年夏から，自由地区の主要都市で，かれの党に反ユダヤ主義の示威運動を繰り返しおこなわせている。また，パリでは，「フランス衛兵隊」を名乗り，ドリオの命令に従順な中核メンバーで形成された青年グループ[84]が，反ユダヤ主義のデモを繰り返しおこない，ユダヤ人商店のショーウィンドウを叩き壊し，ところかまわずびらを貼り，侮辱的な落書きを書きまわった。「フランス衛兵隊を名乗る青年たちは，実際は，つまらないごろつきどもにすぎない」と警視総監ロジェ・ランジュロンは書いている。しかし，同年 10 月初めには，ランジュロンは，かれらのデモのすべてが，ドイツ占領軍当局の正式コミュニケによって非難されたにもかかわらず，実際には，ドイツ占領軍による反ユダヤ主義的措置を準備するものであったと信じるようになっている。そして，「命令は上からきていた。ドリオはそうとはほのめかしてはいないが，かれが命令を実行していたのだ」と書いている[85]。そうだとすれば，ドリオは，ドイツ占領軍の希望を察知して，先手を打って，それをかなえてやったのだといったほうがよいかもしれない。

1940 年 9 月には，ドリオは，とりわけ，特定人種にたいする入学者数と就職者数の差別的制限の実施によって，「ユダヤ人問題」の解決を要求し，一時的な解決策として，戦後に，ヨーロッパはユダヤ人に「遠い国土」を割り当てるべきだと主張している。また，1940 年 10 月には，かれは，ユダヤ人身分法の制定に賛成したが，在郷軍人のユダヤ人のためには例外を設けることを要求している。このことは，ドリオが，このときには，まだ，決定的な人種差別路線を採用してはいなかったことを示していよう[86]。

たしかに，1941 年 4 月まで，すなわち，フランス人民党が事実上，活動を許可されるまで，ドリオの反ユダヤ主義の主張はまだ穏健にとどまり，その論説のなかで，「イスラエルの子孫たち」とか，「ユダヤ・メーソンの金権政治」とか，「ユダヤ・メーソン的共和制」などというだけで満足していた[87]。しかし，1941 年

83) V. Barthélemy, *op. cit.*, pp.230-231.

84) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 15 décembre 1940.

85) R. Langeron, *op. cit.*, pp.173 (mardi 1er octobre 1940), 146 (dimanche 1er août), 149-154, 163-170.

86) 《Il faut régler la question juive》, *L'Emancipation nationale*, 7 septembre 1940 ; 《Le Statut des juifs》, *Le Cri du Peuple*, 21 octobre 1940.

87) J. Doriot, *Je suis un homme du Maréchal, op. cit.*, pp. 41, 106 et 110 (articles du *Cri du Peuple* des 16 novembre, 24 et 25 décembre 1940).

5月4日には，パリ地域のフランス人民党大会で，ドリオは，つぎのようにのべて，ユダヤ人問題を全面的に解決するために，強硬な反ユダヤ主義的解決法を提案した。「ユダヤ人の法的身分を決めるという話だが，それだけでは不十分です。ユダヤ人たちが公衆の精神を損なわないように，それを汚染できないようにし，かれらを頭脳的職業から追い払い厄介払いして，かれらがそれらの職業に携わることができないようにし，フランスの世襲財産と土地を横取りすることができないようにしなければなりません・・・ユダヤ人は戦争を望んでいましたが，その代償をかれらの金と身体で支払わせ，かれらを悲嘆のどん底に追いやり，かれらになにも求めようとはしない国民を苦しめるとひどい目に遭うことを学ばせなければなりません[88]。」

この3週間後，占領地区の党大会で，ドリオは，「人種の救済」のために，「もっとも危険で腹黒い敵，ユダヤ人」を追跡し，ユダヤ人がフランス人女性と結婚するのを禁じる法律を公布するよう要求し，「法的であるが科学的でもある特別な措置にもとづいて，ユダヤ人にかれらの父親たちがフランスでしたことを繰り返すのを禁じるために，ユダヤ人の合いの子たちを処置するべきでありましょう」とのべたのである[89]。このようにかなり不明瞭で，持ってまわった表現を通してではあったが，ドリオは，「ユダヤ人問題」の解決のために，不妊手術のような，生物学的で「科学的」性格の権威主義的措置を考えていたのではないかとさえおもわれる。さらに，リヨンで開かれた非占領地区のためのフランス人民党大会で，ドリオはつぎのようにのべている。「ユダヤ人と決着をつけなければなりません」，「われわれの民族をふたたび純粋なフランス民族にしなければなりません」，そのためには，ユダヤ人を追放しなければならない，「なぜなら，あまりにも多くの知的職業がかれらでいっぱいだからです。あまりにも多くのユダヤ人医師がいる。フランス人医師のために，場所をあけなければならない。あまりにも多くのユダヤ人弁護士がいる。あまりにも多くのユダヤ人食料品店主が，あまりにも多くのユダヤ人中高生が，あまりにも多くのユダヤ人闇市商人がいる。身分規定，強制収容所，人種政策，この3点がユダヤ人にたいするわれわれの政策であります[90]。」

その頃までは，文章や演説においては自己を抑制し，戦前には，このようなばかばかしい考えをすこしも信じてはいないとおもわれたドリオが，なぜ，このような愚かしい反ユダヤ主義のヒステリーにたけり狂うようになったのか。ドリオが人種差別主義的態度をはっきりと採用したのは，おそらく，ヒトラー親衛隊（SS）に気に入るように振る舞わなければならないという気持ちがかれのどこかにあったからであろう。そして，ユダヤ人問題は，ドイツ軍占領下，フランス人民党の活動のために，ドリオが都合よく利用することのできた絶好の宣伝材料だったのであろう。しかし，それだけでは十分な説明とはいえない。この時期，激しい反ユダヤ主義を爆発させることによって，ドリオは開戦直前以来，フランス人民党が経験した危機と沈滞がかれのなかに蓄積させてきた，一種の怒りの情念と怨恨をだれかれ相手構わず晴らそうとしたのであったろうか[91]。

ドリオのすさまじい反ユダヤ主義は，ドイツ占領軍に高く評価され，1941年夏以後，ドイツ占領軍は，それまでグザヴィエ・ヴァラが担当していたユダヤ人問題総合委員会の任務をドリオにとって代わらせ，さらに，かれをユダヤ人問題担当相としてヴィシー政府に入閣させようと考えた。事実，同年8月21日，マルセ

88) Jacques Doriot, *Réalités*, Les Editions de France, Paris, 1942, pp.67-68.
89) J. Doriot, *Réalités, ibid*., pp.113-114.
90) Jacques Doriot, *L'Agonie du communisme*, brochure, 1941, pp.12-13.
91) J.-P. Brunet, *op. cit*., pp.341-343.

ル・デアは，その日記のなかで，かれがアッヘンバッハと長い会話を交わしたとき，アッヘンバッハは「鉛筆を手にして，理想的な政府の概要を示し」，ペタン，ダルラン，ラヴァルのあとに，16 人以上の「大臣候補者」の名前を挙げ，そのなかには，文相にデアの名が，「ユダヤ人問題」担当にはドリオの名があった，と書いている[92]。しかし，政府に加わるとすれば，おそらく，もっと重要なポストしか考えていなかったであろうフランス人民党の党首は，たとえユダヤ人問題担当のポストを提供されたとしても，苦々しい気持をつのらせるだけであったのではなかろうか。

ドリオは，1942 年 11 月 4 日におこなった演説のなかで，「ユダヤ人問題」の解決をめざしたつぎのような 9 つの提案をし，それを 11 月 6 日の『人民の叫び』紙に公表している[93]。

1.占領地区で施行されるすべての行政命令（とりわけ黄色い星印の着用）を，フランス本土および植民地全域に適用する。2.ユダヤ人がフランス市民であることを宣言した 1791 年 9 月 27 日の政令の廃止を公布する。3.すべてのユダヤ人を行政職および行政の管理下にある職務から排除する。4.ユダヤ人の在郷軍人は，「フランス戦士団」の外に，外国人の軍人と同じ資格で，特別な組織に集められる。5.混血児たちにかんして現在施行されている法文は，a)配偶者がユダヤ人であるとき，b)母親がユダヤ人であり，父親が不明あるいは外国人であるとき，c)かれらがユダヤ教徒であるときには，かれらをユダヤ人と同等に扱うために補強される。6.ユダヤ人は他との区別を示す目印を身につける。7.ユダヤ人に戦災補償金を負担させる。4000 億フランと推算されるかれらの財産によって，戦争の被害を修復し，かれらが望んだにもかかわらず，かれら自身は参加しなかった戦争の犠牲者に補償することができるであろう。8.ユダヤ人を追放したフランスの行政機関の監督下で，ユダヤ人自身が管理し，取締り，医療行為をおこなう，一般にゲットーと呼ばれるユダヤ人共同体を創設する。9.偽装者たちをかれらの民族に返すことを目標にした，偽装者摘発のための研究機関を設置する。

このようにして，「全世界の世論に警鐘を鳴らし，ユダヤ人大虐殺がフランスでも始まったと信じさせる目的で，シナゴーグにたいする襲撃を準備したのは，ユダヤ人自身です」（1941 年 10 月 6 日，ヌイイーでのフランス人民党執行部メンバー，ロジェ・ヴォークランの演説），「われわれは，われわれの生存の危機的瞬間にいます。ユダヤ人が頭をもたげ，すでに多くのユダヤ人がかれらの胸の記章を取りはずしました。実際，ユダヤ人による陰謀が全国に広まるようなことになるならば，その指揮をとるよう求められるのは，かれらでありましょう」（1942 年 7 月 16 日，ヴィシーでのエヴェイヤールという名の人物の演説[94]）などというように，フランス人民党の演説家たちは，かれらの勝手な想像力に任せて，激しい反ユダヤ主義的言説を展開したのであった。

1941 年 12 月 7 日午後，フランス人民党はパリのマジック・シティ会館で，ユダヤ人の全財産を没収し，それを戦争犠牲者のために配布することを要求するための集会を組織し，約 1,500 人が出席した。その日の演説者が話した言葉は新奇なものではなかったが，強い印象をあたえたのは，その極端さと激しさであった。「フランスは敗戦を恥じるべきではありません。その全責任はユダヤ人に課せられるべきだからです」と雑誌『フリーメーソン資料』の寄稿者

[92] *Journal de Marcel Déat*, 21 août 1941. マイケル・マラスとロバート・パクストンは，グザヴィエ・ヴァラが「1942 年にドイツ人の信頼を失ったとき，ドイツ人は，一時，ドリオを選ぶことを検討したが，結局，その後任をダルキエに決めた」と書いている。Michaël Marrus et Robert O. Pexton, *Vichy et les Juifs*, Calmann-Lévy, Paris, 1981, p.263.

[93] *Le Cri de Peuple*, 6 novembre 1942.

[94] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapports respectifs des 7 octobre 1941 et 6 août 1942.

ジャック・プランキャールが明言した。また，戦争で盲目になった第1次世界大戦の退役軍人で，元共産党系の在郷軍人共和連盟（ARAC）の副委員長シャルル・ネドレックは，ドイツ人が「最初にユダヤ人を厄介払いしてくれた」ことをほめたたえ，ライン川の向こうでは150万人のフランス人が捕虜になっているというのに，フランスではなお100万人のユダヤ人が自由でいるという事実を激しく告発した。さらに，元労働者緊急救済委員会幹部のレーモン・オーリアックは，ユダヤ人が1933年以来戦争を準備してきたとつよく主張し，「ユダヤ人は蛇のように打ち殺されなければなりません。それは道徳と正当防衛の問題です」とのべた[95]。数日後，数千枚のびらが撒かれたが，それらのびらは，ユダヤ人に戦争，闇市，そして，あらゆるフランスの不幸に責任があることをくどくどとのべたあと，つぎのように政府の決定を批判していた。「最近の政府決定は，1936年以来，わが領土を占拠する外国人のユダヤ人の強制収容を命じたが・・・ユダヤ人が同化するには5年で十分だとは信じられない。一時しのぎの姑息な手段では駄目だ。民族全体が責任を負うべきだ（原文イタリック[96]）。」

先述の1941年5月4日の演説のなかで，ドリオは，かれが勧告した反ユダヤ主義的措置にたいして世論が黙り込んでいることにそれとなく触れ，「フランス国民は非人道的な行為の前にその優しい心を痛めているのであろうが，わたしの心は違う」と語った[97]。その数日後の1941年5月17日，パリ12区のフランス人民党支部が組織した集会で，アンリという名のひとりの演説家がドリオの提案に同調し，「最近とくに，フランス人がユダヤ人の運命に感傷的になったり同情したりしている事実がありますが・・・フランス人が清浄な空気を吸うには，ユダヤ人を厄介払いするだけでなく消滅させることも必要です」と主張している[98]。

ユダヤ人が調査を受けることを義務づけられ，かれらがアーリア人種と交って生活しはじめたのはいつからか報告しなければならなくなったあと，ユダヤ人迫害に反対する最初の不満の声が1941年夏に北部地区であがった。しかし，「以前は反ユダヤ主義を理論上でしか知らなかった人びとに，ユダヤ人迫害の実態の深刻さとファシズムの真の意味をあきらかにした」（モーリス・デュヴェルジェ[99]）のは，1942年6月7日から占領地区でドイツ占領軍によって要求された黄色い星のマークの着用——南部地区では，ヴィシー政府はその義務化の制定を拒否した——であった。

1942年7月16日，パリの冬季競輪場（ヴェル・ディヴ）で，フランス警察の現有勢力を総動員して，ユダヤ人の一斉検挙がおこなわれた。この「ユダヤ人狩り」には，300人から400人の制服を着たフランス人民党の青年たちが警察を手伝った[100]。この事件は，フランス国民の大多数に小さからぬ衝撃をあたえたが，しかし，この程度の反ユダヤ主義的弾圧では，ドリオとその同僚たちを満足させることはできなかった。マルセル・マルシャルは，1942年9月5日のサン・ドニ支部の総会で，300人ばかりの出席者の前で，警察の態度が生ぬるいと苦情を呈し，「若きヒトラー主義者」という映画を上映するまえに，「ユダヤ人といえば，自由地区で4,000人が逮捕されましたが，しかし，かれらはぼろをまとったユダヤ人にすぎないのです・・・たしかに，ユダヤ人をもっと逮捕す

95) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 8 décembre 1941.

96) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340, pièce du 13 décembre 1941.

97) J. Doriot, *Réalités, op. cit.*, p.68.

98) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du mai 1941.

99) Maurice Duverger, *L'autre côté des choses*, Albin Michel, Paris, 1977, pp. 86-88, cit. M. Marrus et R. O. Paxton, *op. cit.*, p.223.

100) Claude Lévy et Pierre Tillard, *La grande rafle du Vel' d'Hiv'*, Robert Laffont, Paris, 1967, pp.23, 37-38; M. Marrus et R. O. Paxton, *op. cit.*, p.233.

ると約束されてはいますが，しかし，ユダヤ人問題相当の特別警察は先ほど廃止されたばかりではありませんか・・・ドリオが政権についたときには，かれは，親玉のブルムやマンデル，それにもちろんレノーもですが，かれらユダヤ人にたいしてもっと抜本的な措置をとることでしょう」と主張している[101]。

フランス人民党の党員たちは，その多数が，ゲシュタポの反ユダヤ機関のリーダーでヒトラー親衛隊（SS）の将校，ダンネッカーによって 1941 年に設立されたユダヤ人問題研究所の会員であった。同研究所は，紛れもないドイツ警察の付属機関であったが，その 1 万 1,000 人の会員のうち 2,100 人がフランス人民党の党員であり，同研究所によって組織された反ユダヤ主義宣伝集会のときには，かれらは警備を担当した。また，占領地区におけるフランス人民党の書記アラン・ジャンヴィエは，同研究所長のセジーユ大尉の主要な協力者のひとりであった。このセジーユ大尉は，1942 年 11 月 4 日にドリオがユダヤ人問題解決の 9 つの方策を提案したのを聞いたあと，フランス人民党に入党している。

フランス人民党の反ユダヤ主義は，パリのキャフェやレストランで人種隔離を勧告するほど過激であった。1942 年 6 月 29 日の『プティ・パリジャン』紙は，フランス人民党機関紙の中央デスクのつぎのようなコミュニケを掲載している。「フランス人民党パリ地域執行部は，パリのホテル業，レストラン，カフェの組合に，首都における公共の秩序を乱しかねない重大な行為の審議を付託したところである。実際，ユダヤ人たちは，かれらの目印である星印を身に着けていようといなかろうと，その無礼な振舞いと挑発的態度によって，客が大勢集まっているキャフェ，ホテルあるいはレストランで度々もめ事を起こしている。これらのユダヤ人の行動は，まったく卑劣なものであって，許すことができない。したがって，多数のレストラン，キャフェ，ホテルの経営者の感情に答えるために，フランス人民党パリ地域執行部は，これらの商人たちの組合に，所轄官庁の承諾をえて，ユダヤ人がはいり飲食できる施設を指定するよう要請した。これら以外のすべての施設に立ち入ることは，ユダヤ人には厳禁されるであろう。」しかしながら，ドイツ占領軍のもっとも反ユダヤ主義的な措置以上のことをしようとする，このフランス人民党の提案は採用されなかった[102]。

冬季競輪場（ヴェル・ディヴ）でのユダヤ人狩りの 4 日後の 1942 年 7 月 20 日，フランス人民党の制服と腕章を着用したフランス青年団人民連合の 6 人の若い活動家たちが，深夜の午後 11 時頃，ヴィクトワール街（パリ 9 区）のシナゴーグに突然乱入した。かれらはモーセの律法の巻物を床に広げて，汚したり破ったりし，聖堂内に放尿し，壁面や聖櫃の底にまでフランス人民党の頭文字 PPF や「ドリオ万歳，ペタン万歳」という文句を書き散らし，朝の 5 時まで，破壊と冒涜の限りをつくした。かれらは 2 人の守衛を尋問攻めにし，そのひとりをシマローザ街（パリ 16 区）3 番地のフランス青年団人民連合本部に連行し，そこで，かれらは，棍棒でおどしながら，パリのユダヤ教長老会議を主宰する大長老，事務局長，シナゴーグの職員たちの住所を無理矢理聞き出した。さらに，かれらは，守衛に，ユダヤ教の大長老から 10 万フランを受け取り，それをもって，24 時間以内に，同じ場所に戻ってくるよう命じ，もし警察に知らせたら殺すぞと脅した。まもなく，これらは警察の知るところとなったが，警察署長がフランス青年団人民連合本部に赴いたときには，「この事件を起こしたものは，ここにはいない」

[101] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 6 septembre 1942.

[102] Marc Knobel, *Doriot, le PPF et les Juifs*, mémoire de DEA, Institut d'Etudes Politiques de Paris, 1983-84, pp. 16-19; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 345-346.

というぞんざいな答しかえられなかった。フランス人民党はあきらかにドイツ占領機関の保護を受けていたのであり，フランスの警察を軽視していたのである。ユダヤ教の大長老によって裁判所に告訴状が提出されたけれども，事件はもみ消され，表沙汰にはならなかった[103]。

1942年秋には，フランス人民党はパリ地域で反ユダヤ主義宣伝集会を繰り返しおこない，人類学の著名な専門家やフランス人民党の情宣活動代表が冒頭で演説をおこなった。これらの集会が開催されるときには，「あなた方は，ユダヤ人をよく知らないから，かれらに同情するのです。（某）月（某）日開催の集会に参加して，かれらの悪行，かれらの犯罪の数々を聞きにきてください」と書かれたびらが散布された。

反ユダヤ主義集会の開催を知らせるこのびらは，つぎのような文章で始まっていた。「フランス国民へ！ユダヤ人はその民族を示す黄色い星のマークを最近身に着けることになったが，その数の多さにあなた方は驚いたことでしょう。“ユダヤ人地区”といわれる非占領地区にあなた方がいるなら，もっと驚いたことでしょう。占領地区全体ではユダヤ人は4万人しかいないのに，非占領地区では100万人以上のユダヤ人が闇市をとりしきっているのです。」しかし，1941年から1942年夏まで，占領地区には，反ユダヤ主義の大きな波が押し寄せた。民衆層のフランス人が，多数の亡命ユダヤ人が「無為な生活を送り」，仕事もせずにぶらぶらして暮らしている一方で，「派手で度外れな浪費」に身をゆだねていると非難したのである。ユダヤ人たちが「遊んでいる」のは，かれらが解雇されて仕事を奪われたからであり，また，ユダヤ人たちがいくばくかの金を自由に使うことができたのは，かれらの不動産や企業がたいてい安値で強制競売の対象となったからだとは理解されなかった。「ユダヤ人たちは，都市と農村，商人と消費者とのあいだに広がった緊張のために，欠乏と物価騰貴の恐れのために，一種のスケープゴートとなったのである」（マラスおよびパクストン[104]）。

しかし，1942年夏のユダヤ人迫害と，とくに8月26－28日の南部地区でのユダヤ人の一斉検挙と，その後に続いたぞっとするような状況のなかで実施されたユダヤ人の強制収容所への監禁は，人びとの気持を動転させ，憤慨させて，フランスの国民感情は急変し，完全に方向転換した。

1943年7月にイタリアで反ムッソーニ・クーデタが起こり，ムッソリーニが逮捕されたあと，イタリア軍はそのフランスの占領地区のほとんどから引き上げ，かれらがニースとその近郊に集めていたユダヤ人を連れていこうとした。それまで攻撃的な反ユダヤ主義の態度を示してはいなかったイタリアは，そのとき，3万人のユダヤ人を受け入れることを承認した。しかし，イタリアが降伏した9月8日，連合国軍がイタリアとの休戦を早まって発表したため，ニースのユダヤ人のあいだで大きなパニックが起こった。数百人のユダヤ人はイタリアに逃れることに成功したが，他のものはニースの住民たちによってかくまわれた。しかし，9月11日，ドイツ軍が到着するや，数千人のユダヤ人が「罠にかかった。それは，戦争中の西ヨーロッパでおこなわれたもっとも野蛮な人間狩りのひとつであった。」恐怖と不安の空気のなかで，フランス人も外国人も区別なく，すべて逮捕されて，ドランシーの収容所に，ついでアウシュヴィッツの収容所に送られた。この陰険な作戦を実行するために，ドイツ軍はフランス人民党の党員たちの助けを借りたのである[105]。これより先，1942年11月8日，連合国軍が北ア

[103] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336, dossier《PPF. Correspondance relative aux réunions》, chemise《Affaire de la synagogue, 44, rue de la Victoire (20 juillet 1942)》, lettres du Grand rabbin au Préfet de police et à Laval.

[104] M. Marrus et R. O. Paxton, *op. cit.*, pp.172-174.

[105] M. Marrus et R. O. Paxton, *ibid.*, pp.240-241.

フリカに上陸し，その結果，11 月 11 日にドイツ軍が自由地区に侵入して，フランス全土を占領したときにも，フランス人民党は熱心な補佐役をつとめたのであった。

時とともに，国際的な力関係が連合国軍に有利に変化するにつれて，フランス人民党の反ユダヤ主義の情念と憎悪はむしろ激化した。サン・ドニを舞台にして起こったひとつの悲劇的なエピソードを語ろう。

1943 年クリスマス・イヴの 12 月 24 日，友人をひとり伴ったフランス人民党サン・ドニ地区書記のオーギュスト・シモンなる人物（またの名シモン・ロラン）が，市の郵便局の前で，50 年来サン・ドニで店を開いていた 75 歳のユダヤ人商人ラコウスキーと擦れちがった。「お前はお前の星印を隠しているのか。けがらわしいユダヤ人め！」とかれは叫び，老人に殴りかかった。老人は身を守ろうとして，襲撃者のめがねと帽子におもわず手を触れ，それらを地面に落としてしまったが，大勢の群集が集まってきて，シモンを罵倒しはじめたため，同伴の友人がかれを連れ去った。1 週間後，ラコウスキーはサン・ドニの治安判事のもとに出頭するよう召喚された。シモンは，ラコウスキーに，壊れためがねの代金 500 フランと損害賠償金 5,000 フランを要求した。治安判事が管轄違いであると宣言したので，シモンは老人を今度はセーヌ県軽罪裁判所に出頭させた。しかし，軽罪裁判所はシモンの訴えを却下し，敗訴したかれに訴訟費用の支払いを命じた。しかし，ラコウスキーにたいするシモンの憎しみは計り知れず，その後も，かれの追求は執拗に続いた。

2 か月後，2 人のドイツ軍憲兵がラコウスキーの住居にあらわれ，憲兵隊本部にかれを連行し，シモンを「殴った」ことを非難した。しかし，かれは自分に罪がないことをやっと証明でき，釈放された。ところが，1944 年 5 月 26 日，ユダヤ人問題担当警察の警官がラコウスキーを逮捕しにかれの住居にやってきた。かれ自身はうまく逃れたが，かれの妻と息子が連行され，ドランシーの収容所に入れられ，ついでドイツの強制収容所に移されて，そこからふたたび出られなかった。フランス解放のときドイツ軍に放棄された文書によってあきらかになったが，シモンはドイツ防諜機関の手先であった[106]。

以上のように，ドイツ軍占領下という状況で，ドリオは，かれの党を明白な反ユダヤ主義の方向に導き，純情で理想主義的な若者たちを党の航跡に引きずりこむことによって，かれらに道を踏みはずさせただけでなく，気持のすさんだ欲求不満の背徳者たちにも，もっともあさましい本能を発露させ，陰険な報復の機会をあたえたのである。ドリオはヴィシー政府に圧力をかけつづけ，ヴィシー政府は，1940 年には，反ユダヤ主義立法にかんしてドイツ占領軍の願望の先をいく措置を実施したけれども，しかし，その一方，1942 年には，フランス国籍のユダヤ人を引き渡すのをこばみ，南部地区では，黄色い星印の着用を義務づけるのを拒否した。この領域においても，また，他の領域においても，ドリオはドイツ占領軍がつねに利用しようとしたいわばドイツの手札となって，ヴィシー政府にたいする圧力手段の役割を演じたといわざるをえない[107]。

ヴィシー政権下で，ドリオがフランス人民党を再生させることができたのは，反ユダヤ主義のデマゴギーをあおり，人種的憎悪をかき立てることによってであり，その結果，同党の姿は 1939 年以前のそれとはひじょうに違ったものになったのである。

それでは，1941 年 4 月以降にフランス人民党がドイツ占領軍当局によって暗黙裡に活動を承認されたとき，同党はどれほどの党員数を数

---

[106] *Archives Nationales, Cour de Justice de la Seine,* dossier Beugras, Celor et autres.

[107] J.-P. Brunet, *op. cit*., p. 349.

えたのであろうか。

この数か月まえ，1941年1月には，ドイツ大使が，フランス人民党の党員数はおよそ3万人であり，そのうち活動的な党員は4,000人であるとみなしているが，それはおそらく同党指導部によって提供された数字であったろう。また，警察の1報告によれば，1941年初めには，フランス人民党は占領地区で4,000人の党員を数え，そのうち2,700人はパリに集中し，非占領地区の党員数は約6,000人であったという[108]。これにたいして，1941年5月4日に開催された同党パリ地域の大会には，598人の代議員が出席し，同党書記の報告では，かれらは1万8,843人の党員を代表していたというが，おそらく，実際の党員数はこの数字の3分の1か4分の1であったのではなかろうか。占領地区のパリ以外の地域では，フランス人民党の党員数はきわめてすくなく，おそらく，1,000人を大きく上回ることはなかったであろう[109]。南部地区では，ヴィシー政府が言論出版を統制する機関として1941年に設置した総合情報室は，当時のフランス人民党の党員数を4,000人と推定し，主として，マルセイユとニース地域に集中していたとみなしている。また，アルジェリアでの党員数は，1,500ないし2,000人と推定された[110]。このように，情報源によって数字はまちまちであるが，いずれの数字についてみても，1941年のフランス人民党は，その戦前の最盛期のようには，もはや強固に組織された大衆政党ではなかった。

もしフランス人民党の党員数が1万5,000人程度であったとするならば，それは，パリ地域では8,000から9,000の，地方では1万2,000から1万3,000のメンバーを数えたデアとドロンクルの国家人民連合をすこし下回ったであろう。ドリオとその仲間たちの目には，国家人民連合は，それが異質なメンバーを集めた組織であり，それだけにいっそう，他の組織からメンバーを引き抜くのに熱心な集団であるとおもわれた。そのため，フランス人民党は国家人民連合にたいする小さな策謀を何度も仕掛けたが，それらはみな成功したわけではなく，滑稽な失敗に終わったこともあった。国家人民連合の第1回大会の前日の1941年6月13日の夜，フランス人民党の6人の若い党員が，国家人民連合本部（パリ8区，フォーブール・サン・トノレ街128番地）に不法に忍び込んだ。かれらは同連合の加入者たちのファイルをこっそり盗むつもりであった。しかし，数日前からその動きを察知していた国家人民連合は，かれらを待ち伏せていた。かれらは捕えられ，供述書を書かされ，写真に撮られて，かれらがあいにく携帯していたフランス人民党の党員証も奪われた。ドロンクルは，国家人民連合の大会の演壇で，「ジャック・ドリオよ，あなたは戦前の政治屋根性をいまだにもっていて恥ずかしくはないのか」と，フランス人民党党首を嘲弄した[111]。

ドリオは，フランス人民党こそヴィシー政権下での唯一の真正の政党であるとみなしていた。1941年6月22日，非占領地区での同党の大会で，かれは「われわれは他の党と同様な政党ではなく，他党には反対の政党である！・・・もしわたしが政権の重責をになったならば，他の政党や他の政党の指導者たちはもはや存在しなくなり，かれらに反対するあなた方フランス国民は，そのため，大いに満足されることでしょう」と叫んだ[112]。こうして，ドリオは，ペタン元帥という体面の背後で，唯一の政党の党首，すなわち国のただひとりの指導者となる運命を受け入れたのである。

---

[108] D. Wolf, *op. cit.*, pp. 343-344, 平瀬・吉田訳, p.337.

[109] *Archives Nationales,* F^{7} 15 583, Dossier《Partis et Groupements politiques》, synthèse de l'inspection générale des Services administratifs de Vichy, 4 juin 1941, p.64.

[110] Rapport des Renseignements généraux, J.-P. Brunet, *op. cit.*, p.350.

[111] *Journal de Marcel Déat*, vendredi 13 juin 1941; H. Amouroux, *op. cit.*, Ⅱ, pp.291-292.

[112] J. Doriot, *L'agonie du communisme, op. cit.*, p.2.

Le Parti populaire français sous le gouvernement de Vichy 1940-1942. 1

Yukiharu Takeoka

L'effondrement de l'armée battue à plate couture, la décomposition de la société en France au début de l'été 1940 bouleversaient l'univers mental des contemporains. Devant la confusion totale du monde, la grande majorité des Français s'agrippaient au Maréchal Pétain comme à un homme providentiel, alors que de Gaulle, qui a fuit en Angleterre en rompant avec la discipline militaire et qui devait être condamné à mort en août, passait pour un simple officier très aventurier. On ne doit pas oublier ce climat historique pour comprendre pourquoi Jacques Doriot se rejoignait à Pétain et à son gouvernement en seconde moitié du juillet 1940. Cependant au lendemain de l'armistice signé le 22 juin, le parti populaire français était en complète déconfiture. C'est en renforçant son antisémitisme que la renaissance du PPF s'était assurée sous l'occupation allemande.

Doriot avait la conviction absolue que l'Allemagne gagnera la victoire finale. Pourtant à cause d'une sorte de retenue qui tenait certainement au fait que l'Allemagne avait partie liée avec l'URSS, surtout par le pacte de non-agression germano-soviétique de 1939, il évitait de souhaiter ouvertement la victoire de l'Allemagne. Mais après l'invasion faite dans l'URSS par les troupes allemandes en annulant le pacte germano-soviétique le 22 juin 1941, la collaboration de Doriot avec l'Allemagne est rapidement devenue positive et explicite.

En juillet 1941, Doriot a créé, avec les autres chefs des mouvements collaborationnistes, la Légion des Volontaires français qui irait combattre le bolchevisme aux côtés de la Wehrmacht. Parmi les chefs des organisations collaborationnistes qui ont signé la constitution de la LVF, Doriot a été le seul homme qui a rejoint le départ du premier contingent des volontaires et qui est allé se battre en personne, comme combattant de la LVF, sur le front de bataille de l'Est.

Classification JEL: 44
Mots-clés: Pétain, antisémitisme, Légion de Volontaires français contre le bolchevisme